



老人ホーム  
里坊さくら苑



京都タクシードライ  
バーさくらの老人介  
護カルテ

音川伊奈利





# 目次

小説老人ホーム 「里坊さくら苑」 1 話さくら老人ホーム設立アドバイザーに	1
小説老人ホーム 里坊さくら苑 2 話さくらお年寄り専門のセックスカウンセ ラーに . . . . .	7
小説老人ホーム 里坊さくら苑 3 話女のパンツ屋が女かぶれしたと京都経済会 から批判 . . . . .	11
小説老人ホーム 里坊さくら苑 4 話夜は魔物が支配している・さくらの幼少時代	14
小説老人と性 里坊さくら苑 5 話さくら 4 歳で母親に捨てられる . . . . .	18
小説老人と性 里坊さくら苑 6 話さくら大きくなったら看護師さんになって爺 ちゃんのお熱を. . . . .	22
小説老人と性 里坊さくら苑 7 話夫の浮気は妻にも責任があるというが. . . . さ くら小学一年生に . . . . .	27
小説老人と性 里坊さくら苑 8 話さくら初潮、大文字駅伝入賞・MK タクシー 値下げの陰、失踪、自己破産、自殺続出 . . . . .	31
小説老人と性 里坊さくら苑 9 話 MK タクシー値下げの陰 2・爺ちゃんさく らに MK 打倒秘策を教わる . . . . .	35
小説老人と性 里坊さくら苑 10 話 MK タクシー値下げの陰 3・さくら 13 歳 でN PO 法人設立へ . . . . .	39
小説老人と性 里坊さくら苑 11 話 MK タクシー値下げの陰 4 サービス満点・ 京都観光個人タクシー倶楽部発足 . . . . .	43
小説老人と性 里坊さくら苑 12 話 MK タクシー値下げの陰 5 人間は嫉妬と 妬みでできている . . . . .	47
小説老人と性 里坊さくら苑 13 話 NPO 法人京都観光障害者車椅子高齢者誘 致及びバリアフリー化促進事業認可 . . . . .	51
小説老人と性 里坊さくら苑 14 話 里井さくらスーパー少女、企画力爆発、京 都観光ガイドブック 3 冊出版 . . . . .	55
なぜ光秀は信長を殺したのか?天王山の合戦は光秀信長の人妻お種争奪戦 京 都歴史裏の小説 11 話 . . . . .	58
小説老人と性 里坊さくら苑 2002 年タクシーの規制緩和は悪質なタクシー会 社を増やすだけ・さくら高校へ . . . . .	62
小説老人と性 里坊さくら苑 16 話境遇は自分でしか変えられない・里井さく ら京都看護大学に入学 . . . . .	66

小説老人と性 里坊さくら苑 17 話身勝手な男は大嫌い・さくらと女性教諭の 禁断の恋 . . . . .	70
小説老人と性 里坊さくら苑 18 話幼い魔女に翻弄小学教諭の生き地獄・さく ら女性教諭まりえとの初夜 . . . . .	74
小説老人と性 里坊さくら苑 19 話女性教諭まりえの大学時代・教え子さくら に愛の調教 . . . . .	78
小説老人と性 里坊さくら苑 20 話さくら 19 歳、母親の浴衣、振り袖を着て祇 園祭宵山、成人式へ . . . . .	81

## 小説老人ホーム 「里坊さくら苑」1話 さくら老人ホーム設立 アドバイザーに

小説 老人ホーム「里坊さくら苑」1話 さくら老人ホーム設立アドバイザーに

里井さくら、元看護師で現在は個人タクシー7年目で「さくらタクシー」の女性ドライバーをしている。さくらはもう42歳にはなっているが、色白で小顔のせいかな30歳前半でも通用するほどのチャーミングな美人でさくらのタクシーの常連客の老人からは孫娘のように可愛がられていた。

そのさくらは浄真宗総本山華山寺貫主の松島常臣に華山寺の寺務所に来るようにとLINEがあり、さくらは寺務所にいた。その寺務所にはさくらの顔なじみの大手ゼネコンの嘉田組の会長で83歳の嘉田善郎も同席していた。この嘉田をさくらに紹介したのは貫主の松島で嘉田とは同じ83歳で二人ともさくらタクシーの常連客でもあった。

この浄真宗総本山は東山の中腹にあり本山を取り囲むように塔頭寺院が50寺院ほどある、山門から東山通りまでは約500メートルの参道があり、この参道から南5町、北10町までが広大な寺の境内でここに学校法人華山学園傘下の華山大学、華山高校、華山女子高校、華山小学中学校、華山幼稚園がある。さらに信者用の宿坊レストランや大ホールもあった。

華山寺は全国の末寺が2000寺院、同じ浄真宗の北山派、西山派合わせて3000寺院の大本山でもある。さらに華山寺は京都観光スポットの金閣寺、二条城に次ぐ大人気寺院で拝観料の収入などで日本一金持ちの寺にもなっていた。

その巨大教団の代表の松島がさくらに、  
「今年の4月で華山女子高校と華山高校を合併して男女共学高校にするが、そうすると女子高の校舎とグラウンドがすっぽり更地になる。そこに里坊の老人ホームを建設する予定になっている。計画の里坊は東山の景観に配慮して4階建てで単身者用の部屋が50室、夫

婦用が10室で60室70名収容できる老人ホームになるが、建設と設計は嘉田組の嘉田君にさせていただくが、その設計の段階で入居者が安全、快適に暮らせるホームにするために「さくら」の知恵を借りたいとさくらに来て貰った」

さくらは

「それは素晴らしい話ですが、里坊ホームに入れるのはお坊さんだけですか?」

「いや、現在本山の周りには約50の塔頭寺院があり、その中の10寺院を里坊に使っているが、なにせ山の中だから救急車どころか車椅子でも下山が難しい。そこで歩行が困難な高齢僧侶と家族に新しい里坊に入らせていただくが、該当者は今のところは本山塔頭寺院には15名、地方の別格本山の里坊には10名だから定員70名の内僧侶関係以外の入居者は35名を予定している」

「それなら私も積極的に協力しますが、いったい何をすればいいのですか?」

そこで嘉田が、

「嘉田組はバリアフリーなどの病院や老人福祉施設の設計、施工は数多くこなしているが、それは健常者の自己満足にしかならないことが分かった。そこでさくらの老人側から見る感性がほしい。たとえば入居者70名、看護師10名、介護士50名の合計130名で施設を運営とするが、この130名を男と女の二通りにくくることはGLBT(レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー)の関係で難しい。私も松島もさくらには随分お世話になり、まだまだ、これからもお世話になりたいが、私達もそう遠くない時期にこの老人ホームに入ることになる。その時にはさくらのような看護師や介護士のお世話になることが、俺達ばかりかさくらのファンのすべてがそう思っている。そんな老人ホームを俺達とさくらで設計施工したいのが本音になる」

さくらは、

「それで私は何をすればいいのですか?」

嘉田は、

「できればさくらの個人タクシーを暫く休業していただき現場設計事務所に出勤していただき設計士にアドバイスをしてほしい」

「き、休業!...それは出来ません。私にはまだまだ私のタクシーを必要としている高齢者が待っています。それにまだ3ヶ月前に皆様が私にプレゼントしていただいた2台目のタクシー車両もありますし...」

「そか...それならさくらの手が空いた時間に設計事務所へ顔を出してほしい。その時間は1時間単位でさくらのタクシーを貸し切りにしてその都度タクシーチケットで支払うが、これならさくらもタクシーを営業出来て私達も多いに助かる」

こうしてさくらは老人ホーム「浄真宗里坊」の設計に参加することになった。さくらのタクシーが皆様からプレゼントされたのは2台目で1台目はさくらが法人タクシーに10年間勤めて個人タクシーの資格が出来た。そしてさくらは個人タクシーの資格試験に一発で合格したことがある。その法人タクシーのころにさくらのタクシーの客として乗車した客の口コミで京都を代表する財界人、文化人、伝統芸能などで活躍していたが、やがて高齢者になってからさくらを知りさくらの強烈なファンになり、その有志が金を出し合いさくらにタクシー車両一式をプレゼントした経緯があった。

そのさくらのタクシーはこれもさくらの強烈なファンであった、トミタ自動車京都販売の会長で79歳の弥栄太郎がさくらのタクシーを選んでさくらに仕様書を見せていた。弥栄が選んだのは京都の財界人を輸送するに相応しい高級大型ハイヤー仕様(1500万円相当)と高級中型タクシー仕様(900万円相当)の2台だったが、さくらは、「排気量の大きい車は大型車や中型車になり認可運賃も高くなります。さくらのお客さまはなにも金持ちだけでなく、年金生活者や生活保護者のお年寄りも沢山おられます。乗車される距離も健常者なら歩ける距離だが歩行が困難だからやむを得ず乗られます。中には大きな国道の歩道橋の階段を上がれないためにただただ国道を渡るためだけにタクシーに乗られるお年寄りもいます。ですから私はトミタ自動車の安い小型タクシー仕様の車でいいのです。そして運賃は最下限の運賃を申請しています」

このさくらの話をきいた弥栄は感動してタクシー仕様(タクシーメーター、行灯、カーナビ、車載カメラ、自動車保険一式)の300万円という安価な小型タクシーをさくらに贈呈することを決めたが、せめてタクシー車体の色とデザインは私に任してほしいとトミタ自動車本社のデザイナーで世界的にも有名なフランス人のcerise(スリーズ)に依頼していた。そのフランス人スリーブがデザインした車体の色は東京オリンピックの聖火のトーチにも使われている桜ゴールドで白の桜の花びらと小さなハート形の花吹雪が派手ではなく控え目に描かれていた。

この桜ゴールドという特殊な塗料を車体に全塗装する費用とデザイナーに払われるデザイナー料、さらにこのデザインの著作権を里井さくらに譲渡契約する費用の総合計はタクシー車体の300万円より高かったが、すべて弥栄太郎がポケットマネーで支払うほどのさくらの大ファンだった。その後、このフランス人のデザイナー、スリーブが世界的に賢威のある金鹿デザイナー賞を受賞したニュースが派手にテレビで流されていた。

さくら個人タクシーは京都陸運支局から営業許可を受けて3月21日から営業となったが、そのさくらタクシーのこけら落としの乗客第一号になりたいと大手ランジェリーメーカーの「フラワー」の会長の塚山誠一が名乗りを上げた。この塚山会長は77歳だ

が、7年前からさくらのタクシーの大ファンになっていた。

そして21日の朝9時にさくらは白亜の11階建て自社ビル「フラワー本社」の豪華な玄関にタクシーを着けた。と、同時に地下駐車場から会長専用車で国産高級車がさくらのタクシーの後に止まり、さらに会長秘書や役員専用車が2台がスタンバイしていた。この玄関の車寄せはかなり広大で新聞社やテレビクルーがチャーターした黒塗りのハイヤーにはそれぞれ京都新聞、朝日新聞、NHKの社旗が付けられてこれも20台ほど待機していた。

さくらはこの日は塚山会長が京都商工会議所の会頭に選ばれることは新聞やテレビのニュースで知っていた。そしてさくらは7年前の塚山会長との出会いを思い出していた。当時、塚山会長の長年の夢であった京都商工会議所会頭選挙に立候補声明はしたが、京都の経済界からは、「たかが創立50年の新参経営者で女のパンツ屋が何をふざけたことをいう、会頭になるのは10年早い!」という批判とパンツ屋と揶揄されて立候補すら出来なかった苦くて悲しい経緯があった。

この京都の伝統老舗ブランドの厚い壁を打破れないとさすがの塚山もかなり落ち込んで会長職さえ放棄したいと悩んでいる時期に偶然にもさくらのタクシーに乗車していた。塚山はこの日は朝から伏見稲荷大社に一人でお参りしていた。それは会頭立候補にオール京都からパッシングを受けて息子である社長にも美人秘書までも信用出来ないほど人間不信に陥っていたからだ。

稲荷神社で参拝を終わった後に参道から大和大路にでると同時にタクシーを拾っていた。

塚山は運転手に

「フラワー本社をお願いします」

塚山の乗ったタクシーは九条通りから西大路通りを右折するために信号待ちをしていたが、塚山は、

「運転手さん、フラワー本社には入らないで西大路をこのまま走って下さい」

その運転手はさくらだが、この乗客がフラワーの会長の塚山だとは気がついてはいたが、わざと声を掛けなかった。タクシーはそのまま北上して金閣寺前になるが、道は自然に右折しているからそのまま北大路通りを東に走っていた。高野橋からは北山の山並みと賀茂川の水の流れに誰もが我を忘れて景色を楽しむが、この乗客の塚山の自宅の豪邸も賀茂川左岸下賀茂の一等地にあり、この塚山も毎日のように賀茂川の水の流れを屋

敷から眺めて楽しんでいるときくらは思っていた。

高野橋を渡ると同時に塚山はやっと自分を取り戻したのか?、タクシーの前部の乗務員にある里井さくらという名前を見ながら、

「里井さんは随分若く見えますが、もうタクシーに乗られて何年ですか?」

「はい、皆様から若い若いとよく言われますが、私は元看護師で25歳まである病院に勤めてからタクシー運転手にトラバークして5年になりもう30歳になりました」

「ほう...看護師さんをやめてタクシードライバーにですか?、若い女性になぜ?タクシー運転手などと聞けば女性蔑視とか職業差別になるから聞きませんが、なぜか?気になります。ハハハ」

「そうですね~私も新聞やテレビで有名な塚山会長さんが、疲れた顔で目を閉じて考え事をしている姿に...こんな偉い人でも何か深刻な悩みが有るのかと興味深々になりますからお互いさまです。ホホホ」

「そか、そう見えましたか?、私は里井さんと少しお話ししただけで元気になりました。今日はもう会社には戻りませんから里井さんのタクシーを貸し切りでどこか静かな処でお話ししませんか?」

「はい、ありがとうございます。それでは私のお客さまが趣味でなさっている南禅寺隠れ里という場所にご案内しますが、この隠れ里には食事が出来ませんので何かランチをどこかでしませんか?」

「そういえば私も急にお腹が減ってきましたが、里井さんがいつも行っている店に行きたい気分です」

「あら、私が毎日ランチを頂いているお店はタクシー運転手のたまり場でテーブルも4席しかなくすべて相席になりますが、それに500円の日替わり定食のみですからお口に合わないかも?」

「いやいや、私も若い時はかなりの貧乏でしたから...その店に行きたいです」

こうしてさくらのタクシーは京都大学近くの百万遍にある喫茶ランチ「らんらん」に着いたが、店はタクシー運転手と学生でほぼ満席だったが、さくらと紳士が店に入ってきたので運転手らはテーブル席を一つ空けてくれた」

この日の日替わり定食は「焼き鯖定食」でさくらと塚山は向かい合って食べたが、塚山は、

「こんな美味しいランチは久しぶりでなにか50年前にタイムスリップしたようだ!」

「この喫茶店は京都で最初に喫茶の許可がおりた店でその許可証は木簡でミルクホール第壱号とあります。当時は喫茶店が珍しく京都大学の学生のたまり場でこの店の常連客の5名がノーベル賞を獲得したというのですよ!」

「ほう、ノーベル賞か?すごいね~それに比べれば京都商工会議所の会頭なんて極々小さい悩みだったのか~里井さん、ありがとう」

こうしてランチが終わった後にさくらのタクシーは南禅寺の隠れ里に向かっていた。  
(2話につづく)

## 小説老人ホーム 里坊さくら苑 2 話さくらお年寄り専門のセックスカウンセラーに

小説老人ホーム 里坊さくら苑 2 話さくらお年寄り専門のセックスカウンセラーに

こうしてランチが終わった後に大手ランジェリーメーカーの創業者で会長の塚山誠一を乗せてさくらのタクシーは南禅寺の隠れ里に向かっていった。百万遍から東大路を南下して平安神宮の赤い大鳥居をくぐり抜けて南禅寺の参道から山門の前を左折して日本家屋の豪邸が建ち並ぶエリアに入った、ここで塚山が、「このお屋敷はたしか元総理の細川護熙さんの別荘で総理になられる前には佐川急便の会長など京都政財界の面々と会食を2回ほどしたことがあるが、すごいお屋敷だった」

「へえ～このお屋敷で総理と会食ですか～すごいですね、今から行くお屋敷も元総理の西園寺公望公の別荘で今は公望公の何代か後の西園寺公一さんが所有のお庭ですが、当時のお屋敷は山県有朋の無鄰菴に移築されて長い間お庭だけが残り、今は南禅寺隠れ里として離れ風の小ぢんまりした山荘が3棟あります。その山荘は完全会員制で正会員の紹介がなければ会員にはなれないシステムになっています」

「そうですか?、で、里井さんは会員ですか?」

「はい、私のタクシーの貸し切りのお客様はすべてこの南禅寺隠れ里の会員です」

さくらのタクシーは細川邸の裏側にあるお屋敷の門に入ったが、ここは高い庭木に囲まれて丸太町通りや南禅寺に抜ける観光道路の車の騒音も完全に遮断された空間になっていた。表門から砂利道を右折した所に3棟の平屋の山荘があり右端の山荘以外はシャッターが閉まっているが、さくらはシャッターが開いているガレージにバックでタクシーを入れた。

部屋は6畳と8畳ほどの和室だが、奥の部屋の奥には窓いっぱい窓があり、そこには地泉回遊式の池があり、その水面が窓の真下にありカルガモが数羽こちらを気にしながら泳いでいる。庭の借景には東山連峰の大文字山の大きな文字が目に見える。6畳の部屋には応接セットと大きなテレビとデスクパソコン、8畳の部屋にはダブルベッドがあり、透明ガラス張りの大きなバスルームもあった。

塚山は思わず、  
「いや～静かで素晴らしい～ここならあの煩わしい本社の会長室で仕事をするより楽しくてアイデアがどんどん湧いて来る気がする」  
「そうでしょ～先週もアメリカの GM モーターズの会長のご子息で次期社長に決まっているご夫婦にここを京都観光の合間の休憩の場所に案内したところ塚山さんと同じことをおっしゃっていました」  
「何?... あの GM の社長ご夫妻を里井さんの小型タクシーで... 京都観光???」  
「そうですよ～小型タクシーは狭い道の京都の文化的な乗り物で省エネにもなります。それに狭い車内だにご夫婦の距離が近くてより愛を感じるともおっしゃっていらしたは～ホホホ」  
「なるほど～それなら～私も会長専用車を止めて里井さんのタクシーを利用します～ハハハ」

さくらは備え付けのコーヒーメーカーでコーヒーを入れてソファに座っている塚山に出している。さくらも座ってから塚山に、  
「さて、なんのお話から始めますか?」  
「そら～里井さんの看護師からタクシードライバーにトラバークした話を聞いたかったが、それより、里井さんがなぜ?GM の社長を知っているのかが知りたい」  
「塚山さん、たった今からさくらと呼び捨てにしてください。私も塚ちゃんと呼びます。分かった?塚ちゃん!」  
「はい、さくら、分かりました～それにしても塚ちゃんと呼ばれるのは 50 年振りかな?」  
「でも塚ちゃんは京都商工会議所の理事で京都経済同友会の幹事長もされて同じ経営者仲間との飲み会などの交流も幅広いのに?塚ちゃんは皆さんからなんと呼ばれているの?」  
「そら～塚山社長とか塚山会長だが?」  
「へえ～でも皆さんとは仲が良かったの?」  
「私もそう思っていたが、いざ、京都商工会議所の会頭選挙に立候補宣言と同時に陰口で婿養子で会社を乗っ取ったとか、滋賀県の百姓出身だとか、成り上がりの女のパンツ屋だとか言われて立候補を断念した」  
「あらら、それが悔しくて悩んでいたの?」  
「アハッハ～さくら、そこまでズバリ直球で来られると返す言葉がない...」  
「悩んで解決する問題なら悩んだらいいが、悩んで解決しない問題なら悩むことは損よ! 塚ちゃん」  
「そか、それならもう悩みません～さくら」

ここでやっとさくらに打ち解けたのか?塚ちゃんもさくらにズバリ直球の質問をしてきた。  
「さくらは私をこんなラブホテルのようなベッドのある部屋になぜ案内してくれたの?」

「あら!ラブホテルだなんて~西園寺公望公が怒りますわよ!、それに塚ちゃん?、あのベッドが気になるの?、まだまだ若いやん!なんなら、さくらと一緒に風呂に入ります? なにも遠慮は要らないのよ!」

さくらに振り返りにあった塚山は古希とは思われないほどの可愛い仕草で「さくら...ゴメン」と謝っていた。

「ところで塚ちゃんは奥様と仲がいいの?」

「いや、もう40年も仮面夫婦を演じているが、離婚すればなにかと商売に影響があるとズルズル40年にもなってしまった」

「それなら奥様とのHは?」

「そんなものは社長の長男が産まれてから一度もない」

「へえ~それならどこかに女性を囲っているの?」

「それもない!」

「それなら性処理は自分で?」

「若い時はそれもあったが、なにせここ45年間は商売に夢中でフラワーをここまで大きくしてきた」

「へえ~まだ70歳と若いのに性的不能者になったの?塚ちゃん!」

塚山はここまでさくらに質問攻めにあって、それに素直に答えている自分を発見して苦笑していた。それはそうだろう~たまたまタクシーに乗った運転手がさくらであって、それもまだ5時間ほどしか経っていないのに妻とのセックスの有無まで聞かれて正直に白状していたからだ。

ここでさくらが、

「私は看護学校を卒業してから終末ケア専門のいわゆる老人病院の医療法人陽気日会観音病院に就職したの。その観音病院の看護師や介護士はほとんど女性で男性は1割程度しかいなかったの、入院患者は寝たきりやアルツハイマーや軽度の認知症が多くて食事の介護からトイレ、風呂まで看護師や介護士がしなければならないが、特に患者を風呂に入れるのには重労働でナース服では汗まみれになっていたの。そこで私は院長に風呂に入る時は水着で介護することを提案したらそれが許されて女性も男性の看護師、介護士も思い思いの水着でお風呂場で仕事をしたら、それが男の患者はもちろん女の患者までオオウケになったの。私の水着は真っ白のセクシーなビキニで患者さんの身体を洗ったりしていたが、それから男の患者も女の患者も看護師や介護士が各患者にリハビリや認知症改善のメニューを渡していたが、患者たちは率先してメニューをこなしてたった半年で天国へ旅立つ予定だった終末患者と思われていた5名が自宅や元の老人ホームに引き取られるほど病気が改善したの」

これを静かに聞いていた塚山は、  
「ほう～これはすごくいい話だ、私のフラワーでも老人福祉に力を入れているが、老人が元気になるという原動力の源とは性に関する色気、事柄が一番だと分かった、さくらありがとう。早速、会長のアイデアとして商品開発部に開発を命令するが、その続きは?さくら」

「はい、この老人サービスが噂になってこの病院の人気もうなぎ登りで入院を希望する患者も予約制になりそれも5年待ちになり、この病院に入院するまでは元気でいたいとジムに通ったり、ボケ防止教室に通ったり、80歳の老婆が英語教室に通ってたりで院長も看護師長ももっと患者が元気になる作戦のアイデアを病院職員に募集するようになったの」

「これはおもしろい!、自分が終末を迎える病院の予約の順番が来るまでは健康でいたいという願いの目標があるからなんでもに挑戦できる。私も京都商工会議所の会頭が目標だったが、さくらと一緒にいたらそんなことよりもっと大切なことがおぼろげに頭の中に浮かんできた」

「ところが有名な暴露週刊誌の「週刊文秋」に私が水着姿で患者さんの背中を流したり、患者さんと同じ浴槽に浸かっている写真が盗撮されて週刊誌の見出しには「過剰ピンクサービス老人ホーム」だとか「美人看護師のヘルスサービスで患者家族から苦情」なんて書かれて病院院長が辞職したの。その記事の2弾で全日本看護師協会の会長の意見として「看護師が水着姿で介護するのは看護師倫理に違反」するという記事を見て私も看護師を辞めてタクシードライバーにトラバークしたの」

「そうか～でもさくらが看護師を辞めていなかったら私はさくらと知り合うチャンスがなかった...それに会長も辞職していた」

「あら!塚ちゃん本当にそう思っているの?それで私はタクシーに乗りながらボランティアでお年寄り専門のセックスカウンセラーを始めたの」

「ふむ...セックスカウンセラーとは...?」

「あら、塚ちゃん、そんな真剣な目でさくらを見ないで!その話はまた今度お会いした時にします。それにもう午後4時前で私は入庫しなければならないの、塚ちゃんを送りますからどちらまで?」

「もうフラワー本社には出勤しないと決意していたが、本社の会長室で私の今後の生きる目標を模索して見るが、さくらまた私に会ってくれる?ハハハ」

「はい、いつでも私のタクシー貸し切り予約をお待ちしています」

さくらはフラワー本社の玄関で京都商工会議所新頭取が出てくるのを待つ間に塚山誠一を最初にさくらのタクシーに乗せた12年前のことを思い出していた。

## 小説老人ホーム 里坊さくら苑 3 話女のパンツ屋が女かぶれしたと京都経済会から批判

小説老人ホーム 里坊さくら苑 3 話女のパンツ屋が女かぶれしたと京都経済会から批判

さくらはフラワー本社の玄関で京都商工会議所新頭取が出てくるのを待つ間に塚山誠一を最初にさくらのタクシーに乗せた 12 年前のことを思い出していた。その塚山は 30 名ほどの会社幹部とともに正面玄関を出てきたが、そこにはテレビ局のカメラクルーが一斉にカメラを回している。これは塚山が悲願をしていた京都商工会議所の会頭に 12 年前に立候補していたが、京都経済界からの猛烈なバッシングから諦めた経緯から 12 年振りに京都経済界からの満場一致で推薦されたことをドラマチックに放送するための取材でこの後、カメラクルーはフラワー本社から京都商工会議所に入り、議場で塚山誠一が会頭として選ばれるまでを取材する予定になっていた。

カメラクルーは当然ながら玄関で待機している会長専用車の国産高級車に乗るとは思っていたが、なぜか塚山会長はその前に停まっているピンクの小型個人タクシーの前で女性運転手と挨拶をしている。

その運転手のさくらは、タクシーのドアを空けてドアサービスをしながら笑顔で、「塚ちゃん、会頭就任おめでとうございます」

「いやいや、もうこんなものはどうでも良くなっていたが、経済界から会頭に成り手がないからどうしても会頭に推挙されて断われなかった。それより、さくら 2 台目のタクシーおめでとう」

と言いながら、ピンクのタクシーの前からもデザインを確かめていたが、塚山は若くて超美人の秘書に商品企画開発部長をここに呼ぶように告げると秘書は見送りの前列にいたこれまた若くて美人の部長を呼んだ。塚山会長はその部長に、「このさくらタクシーのデザインを参考に新しいランジェリーの企画及び商品化をなさい」

「はい、会長...素敵な桜ゴールド色に白いさくらの花びらとハートの花吹雪のデザインはフランスの有名なデザイナーで今年の金鹿賞を受賞されたスリーブさんの作品だとデザイン専門誌で拝見して私も素敵だと思いフランスのスリーブさんの事務所に連絡した

ところこのデザインの著作権はすでに日本国の里井さくら様に譲渡されていましたが、会長、早速、里井さくら様の事務所を探して著作権の交渉をいたします」

「おいおい、部長、その里井さくらというのはこのさくらのことだ!」

「ひえ～……………」

さくらの小型タクシーにフラワー会長の塚山会長一人だけ乗せたピンクのタクシーを先頭に会長専用車、役員専用車の2台、それにマスコミ各社がチャーターしたハイヤーが後に続き20数台の車列となった。車内でさくらが、

「あの企画商品開発部の部長さんも秘書課長も若くて綺麗な方ですね～塚ちゃん」

「あの二人を含めて若手の女性社員を積極的に幹部に引き上げている。あの二人も大学を卒業してフラワーに入社してから恋愛を経験して結婚して子供もいるが、それまでの女性幹部は恋愛も結婚も犠牲にして会社一筋で幹部というより出世競争の勝ち組としてのプライドだけで生きているお局様になってしまった。いわば、我が社発展の犠牲者に創業者の私がしてしまった。それに気がついたのは私がさくらと初めて会ったところからさくらは私に間接的に教えてくれたからだ!」

「そうだったの～私は一般的な話として女性社員が結婚すれば寿退社とか子供が出来れば退社を促す経営者は女性の敵だとは今も思っています。だって誰でも人を好きになりデートもしたいが、深夜まで会社が社員を働かせれば出会いのチャンスもまた、デートの時間もない。そして結婚すれば、子供が出来ればそのキャリアを捨て去ることになり会社が大幅に損害したことということが分からない経営者が多いといったことですか、塚ちゃん」

「そうだ!、そのことを私は京都経済同友会の会合で口を酸っぱくして訴えたが、そのころは女性はどうせ退社するからと幹部教育は無駄としていなかったばかりか私の考えは「どうせ女のパンツ屋の女かぶれ」と揶揄されたが、私はさくらかぶれを信じて寿退社のルール廃止、恋愛出来る時間の確保のために全社員の20時以後の残業禁止、そうなれば結婚する男女の社員が増えて社内ベビーブームになり、さらに育児休暇、子育て中の社員の残業禁止、そして本社近くに保育所を作った。そうしたところ女性社員も目覚めたのか出世競争ではなく自分の生活を守るための愛社精神を発揮して業績はうなぎ登りになった」

それで、そのお局様はどうなったの?塚ちゃん」

「課長以上のお局様35名を集めて私が直接意見を聞いたが、皆さん、着ている物は良いものを着ているが、肌には艶がなく疲れ果てた顔で年齢よりは老けていた。結婚して子供を授かったお局様はたった8組で残りのお局様は恋愛どころかまだ男を経験していないと私は感じたがそれはセクハラで聞かなかったが、それもこれも私の経営理念の犠牲者だと私は率直に謝った」

「それでお局様は?」

「まだ、私の経営理念のマインドコントロールが消えていないのか、まだまだ、定年までは仕事がしたいというお局様がすべてで私の気持ちが理解していないようだった」

「そうなの～入社して30年以上のお局様は会社が命でそれが生き甲斐だったことが会社を大きくしたことになるのね～女というより男の猛烈社員になるよね～」

「そこで私はこのお局様に今まで誰よりも早く出勤して退社は誰よりも遅い管理職に今後は定時出勤、定時退社を命じた。その名目は幹部を育てるために管理職の仕事を覚えさせることだった」

「一般社員には残業8時まで、管理職は早出残業は禁止で仕事は上手く行ったの？」

「それがなんのトラブルも支障もないばかりか業績が上がったことに大きなショックを受けたのはお局様だった。私は気の毒なことをしたと後悔したが、そのお局様たちは時間が余りに余って仲の良いお局様たちとスナックやカラオケのヒマつぶしをしていたが、その間に見る見る内にお肌に艶が戻って若くなったことをお局様仲間で意識したのかさらにお化粧品からファッションまで競争するようになったそう。そして異性にも興味が湧いたのかホストクラブにもハマルお局様も出現したらしい？、それらがきっかけで我社のというより、これらのお局様が企画開発したランジェリーまで着るようになってやっと女性の気持ちが芽生えて女性が求めるランジェリーが分かったという意見が大勢が占めた事から時間を与えたくれた私に感謝することになり、各お局様が独占していたポストを若手に引き継ぐことを認めていただき今の若手の幹部になった」

「それでお局様は退職？」

「いやいや、新たにシニアランジェリー企画開発部を作り、年取はそのままに定年まで働いてもらうことで納得して貰った。そうそう、たった2組だが、その間に恋愛して寿退社する強者もいたからまずは目出度い出来事だった」

その塚山新会頭を乗せたさくらのピンクのタクシーは烏丸二条の京都商工会議所の玄関に着いたが、出迎えの花束を持った会議所理事や職員、それに塚山新会頭を待ち受けていたテレビカメラもさくらのタクシーの後ろに止まった国産高級車の会長専用車から会長が出てくるのは当然でそこにピントを合わせていた。さくらのタクシーの車内では、塚ちゃんが、

「さくら、会頭就任のお祝いに何をプレゼントしてくれる？」

「そうね...それならフラワーで一番セクシーなランジェリーを数着選んでファッションショーをして差し上げます」

「そか、さくらありがとう」

こうして塚ちゃんはさくらのドアサービスを受けてタクシーを降りた瞬間にマスコミからのお祝いのフラッシュを浴びていた。

## 小説老人ホーム 里坊さくら苑 4話夜は魔物が支配している・さくらの幼少時代

小説老人ホーム 里坊さくら苑 4話 夜は魔物が支配している・さくらの幼少時代

さくらが産まれると同時に両親が離婚してさくらは母親の里井尚美の実家に母子ともに引き取られていた。実家のさくらの祖父の和博は京都市中京区で建売りの住宅を個人タクシーの営業所にして個人里井タクシーの運転手をしていた。さくらの祖母は母親の尚美が中学生の時に若い男と浮気してそれが理由で離婚していた。その中学生の尚美を男手一人で育てたのは父親の和博であった。

そのころのタクシーは高度経済成長の真っ最中でタクシーの景気は良くて娘の尚美には何不自由なく育てて尚美が習いたいダンス教室からスケート教室まで月謝を出しても経済的には余裕があった。とはいっても尚美にすれば母親が若い男と浮気して離婚したことを許せずはずは無く父親が夜勤でタクシーに乗っている間は寂しくて夜遊びをするようになっていた。

やがて高校進学とはなるが、遊び呆けていた尚美には公立高校どころか私学さえ難しかったが、どうにか華山高校に拾われていた。この華山高校は浄真宗の経営で校長の松島常臣も浄真宗総本山華山寺の塔頭寺院の住職になる。尚美はなんとか高校を卒業して信用金庫に就職するが、長くは続かず退職して木屋町のスナックで働いていた。そこで知り合った宅急便の運転手の拓也と同棲していたが、尚美が妊娠して二人は結婚式すらなく籍を入れて木造のアパートで暮らし長女のさくらを育てる予定だった。

尚美が妊娠中の数カ月のうちに拓也は何回も尚美にセックスを求めてきたが、尚美は拒否していた。これは切迫流産の恐れがあるからと男性器の挿入のセックスは医師から禁止されているためだったが、若い拓也はそれが理解出来ずに尚美に何回も求めてきた。ただ、尚美も拓也が可哀そうだと思い手や口の愛撫で我慢してほしいと願うが拓也はそれでは満足せず尚美が以前働いていた木屋町のスナックに連日通うようになった。拓也は目当ての女の娘を高級寿司で有名ないろは寿司での食事後はラブホテルに誘っていた。

ただ、この拓也の女の娘の口説き方は尚美にも経験があり、それに尚美も騙されて拓也の子供を身ごもっていた。拓也はそのころから当時テレビで派手に宣伝していた大手消費者金融に手を出して借金地獄の一丁目に入っていた。この拓也の借金を尚美は知らないまま籍を入れていたが、尚美の妊娠で尚美からセックスを拒否されたことからまた消費者金融の金を当てにして遊び始めていた。

やがてその金融会社のカード会員も5社になりその借金の利息を返すために街金融まで手を出していた。そして長女のさくらが産まれて退院する際に病院に支払うために尚美がタンス預金をしていた30万円まで拓也が使いこんでいた。これは父親の和博に尚美が借りて支払い無事父親の個人タクシーでさくらと共に尚美の実家まで帰っていた。拓也は産まれてきた子供の性別も知らないまま、勤めていた宅急便の会社を無断欠した後に蒸発したが、妻である尚美に消費者金融各社の弁護士から内容証明郵便や督促状が連日届いていた。その借金の総額は490万円だったが、これは父親の和博が所属する京都個人タクシー協同組合の顧問弁護士に仲裁してもらい半額は拓也の結婚前の借金として約半額の250万円各金融会社と和解して和博が全額支払っていた。ただ、これで拓也の借金は消えた訳ではなく拓也は消費者金融から全国手配されて暴力団系金融に捕まって山形県のダム現場のタコ部屋で働かされていると風の噂で尚美にも届いてはいたが、尚美は当然の報いと父親にもこのことを報告をしなかった。

こうして祖父、母親、さくらとの3人家族で幸せに暮らしていたが、さくらも3歳になり保育園に母の尚美は三条商店街のスーパーにレジのパートに出るようになっていた。尚美はここで同じような境遇でバツイチで子持ちで働いていた若い女性らとすぐに友達になっていた。とはいってもそれぞれシフトがまちまちでゆっくり話そうと思えば夜しかなかった。尚美は父親のタクシーの休みの日を聞いてパート仲間と飲み会をするから夜の少しの時間さくらを見てほしいと頼んでいた。すると父の和博は、「若い女性が夜ウロウロするとろくなことがない。この世の中は家族以外は信用ができない。それに酒が入ると人間が元々持っている悪い本性の欲望が理性や教養を消し去るから楽しくなり、酒に溺れてしまう。飲むなど言わないが、まだ理性が保てる各自の家で飲んだほうが安心だ!なんならその尚美の友達をここに招待して飲めばいい」  
「なにをいっているの〜お父さん〜皆んな家から離れて外の空気を〜吸うことでストレスが解消して明日から家事に子育て、そしてパートに精を出せるのよ〜お、お父さんだっ  
て近所の居酒屋でストレスを解消しているのと同じよ〜」  
「わしはお前に二度と同じ過ちをしてほしくないからいっている!、夜は魔物が支配している。魔物はお前のような身体は一人前だが、頭は半人前の若い女性を狙っている。わしはタクシー運転手一筋で40年になるが、その魔物に侵された輩ばかり客にしている、その客の背後には魔物が取り憑いているのが見えるようになった。その魔物は今の尚美

に取り憑いているのが、わしには見えるからだ!」

「また～そんな気色悪いことを言って、可愛い孫のお守りをするのが嫌なの～お父さん」

尚美は父親とこういう口喧嘩を友達との飲み会の前日には必ずしていたが、結局さくらを父に任せて飲みにいった。さくらはこの爺ちゃんと母の会話をしょっちゅう聞いていたが、子供心にこれは爺ちゃんの方が正しいと思ってはいたが、母が飲み会の夜は大好きな爺ちゃんが遊んでくれるので母が飲み会の時はさくらも楽しい夜になっていた。

さくらと爺ちゃんが思い切り遊んだ後は一緒にお風呂に入り、歯を磨いて爺ちゃんに絵本を読んでもらいながら寝るのが母の飲み会の夜の楽しみだった。その爺ちゃんはさくらを寝かしてから焼酎のお湯割りをテレビを観ながら3杯ほど飲むのがこれまた楽しみだった。爺ちゃんが焼酎を3杯ほどを飲み終えるころには尚美も家にいつもは帰ってきたが、今夜は12時になっても帰って来なかった。

そのころ尚美は四条大宮の雑居ビルにあるカラオケスナックの「貴婦人」にいた。この店はスーパーの同僚の泰子の紹介で同僚との飲み会の二次会でもう5～6回来ていたが、いつもは同じメンバーの3～4名で来ていた。それが今夜はメンバーが早く帰り尚美だけで店に来ていたが、たまたま、この夜は客足が11時には切れていた。マスターは50歳の直樹で店のホステスさんは常に2名のシフトで回していたが、この好景気でスナック壤の時給も2000～2500円と跳ね上がるがそれでも木屋町や祇園ではホステスさん不足で店をやむなく閉めるスナックがあった。この貴婦人に勤めていた女子大学生や若いOLのアルバイトも木屋町や祇園のスナックにトラバークして今夜もマスター一人で営業していた。

マスターは店の看板を消灯して玄関ドアを錠してから、尚美に、  
「尚ちゃん、今夜は私のおごりにするからもう少し付き合って」

といいながらテーブル席のソファーに座れと目で合図して白のスパークワインのコルクの栓を開けていた。尚美は先にソファーに座るとマスターは尚美の左側に座ってきた。まずは乾杯となったが、尚美はこの展開にかなりの危険を感じた。とはいっても尚美も拓也と別れて3年もの禁欲生活にイライラして週一回の飲み会でストレスを発散していたが、たまには父親やさくらに八つ当たりしているほど欲求不満になっていた。

乾杯の後にはマスターの右手が尚美の左脚の太ももに置かれた瞬間に尚美の全神経が太ももに集中しているのが自分でも分かった。その手は尚美の太ももを撫ぜたりしながらジーンズの突き当たりまできた。この時に尚美は一瞬的に、マスターの手を払いのけて

店をでるか?このまま身を任せるかの判断をしなければなかった。これはマスターも同じで尚美の反応を見て瞬間的に決めなければならない。

マスターの右手は尚美の背中から前に回り右の乳首を鷲掴みしているが、それは痛くはなく身体中に性電気が走る感覚で尚美の口から思わず「フウ～」とも「イィ～」ともとれるタメイキが漏れたことから尚美になんのためらいもなくマスターの特技の愛撫で尚美を悶えさせたり、じらしたりながら尚美が敏感に感じるスポットを探し当ててそこを攻めまくっていた。尚美は尚美で元夫の拓也と付き合っていたころラブホテルで燃えたことを思い出しながら声を遠慮なく出していた。

尚美がふと我に返って腕時計を見ると1時半になっていた。マスターへの挨拶もそこに店を出た、四条大宮から家までは歩いて7分～8分ほどだが、タクシーを拾い家に帰った。家に静かに入り居間を見るとそこには父が焼酎を飲みながら怖い顔で尚美を睨んでいたが、尚美は目を合わさず風呂場でシャワーを浴びてから居間を見ると父は自分の部屋に帰っていた。尚美はさくらの可愛い寝顔を見てから自分の布団に入ったが、なぜか父の口癖だった「夜は魔物が支配している。わしはお前に二度と同じ過ちはしてほしくはない」というのが一瞬浮かんだが、すぐに深い眠りについた。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 5 話 さくら 4 歳で母親に捨てられる

小説老人と性 里坊さくら苑 5 話 さくら 4 歳で母親に捨てられる

尚美は日頃のストレス解消にスーパーの同じバツイチの同僚らと週一で飲み会、二次会はカラオケスナック「貴婦人」で歌うことでなんとか身体の芯から湧いてくる欲求不満を誤魔化していたが、この店のマスターの直樹に誘惑されて一度だけ関係を持っていた。元々尚美はこのマスターのことは素敵なおじさま程度で年も尚美は 25 歳、マスターは 50 歳と倍は離れていて愛とか恋の対象ではなかった。

それにマスターには妻と中学生と高校生の息子の 4 人家族で店に近い分譲マンションに住んでいることは以前から知っていた。「それなのになぜ?」と尚美は自問自答していたが、結局尚美の父親の口癖だった「夜は魔物が支配している、その魔物の餌食」となったという答えしか見つからなかった。この件では父親も尚美も面と向かって敢えて話題にしなかった。もちろん同僚も知らないままいつも通り週一で飲み会と二次会を貴婦人でしていた。ただ、帰宅の時間だけは父親の手前か守っていた。

三ヶ月ほど経ったある日、尚美の勤めているスーパーのレジにマスターが現れて尚美にメモを渡していた。そのメモには話があるから電話をしてほしいとあった。尚美は電話ぐらいはと電話をしたが、話は昼間店ですするというのだが、尚美は前のことが一瞬頭に浮かんだ。しかし、それは嫌なことでも苦痛の出来事でもなく、尚美もそれを心の底で待っていたのか、店に行く前にはシャワーを浴びて昔身に着けていたセクシーな下着をタンスの奥から探し出して着ていた。

四条大宮の雑居ビルの 3 階にあるカラオケスナック「貴婦人」だが、夜はなんとも感じなかった雑居ビルの汚さが昼間は陰湿で薄暗く不気味ささえ感じる。この日はスーパーを休んでさくらの保育園のお迎えの時間が遅い日を尚美は選んでいた。尚美が店に入るとマスターは入口のドアに接錠して尚美をテーブル席のソファに座らしてコーヒーを出してくれた。

マスターの話では店からホステスさんが消えてから女の娘目当ての客が激減した。客はカラオケ好きのおばさんばかりでドリンク2杯とチャームの乾き物と1曲100円のカラオケ10曲で3時間ほど粘られて2500円の水揚ではここの家賃も払えない。来月の11月から年末が水商売の稼ぎ時だが、求人広告を出しても冷やかしの電話の一本もない。

そこで尚美に、  
「時給2000円ですから午後7時から12時までの5時間毎日働いてくれないか?」  
「そ、それは出来ません、マスターごめんなさい」  
「そか、それならいつも水曜日に店に来てくれるが、その日だけでもカウンターに入ってほしい」

尚美もそれなら11時までは店に入ると約束したと同時に尚美はマスターにキスをされたが、尚美も抵抗の素振りも見せずマスターの愛撫を三ヶ月も心待ちしていたので心も身体もマスターに委ねていた。

こうして水曜日に尚美がカウンターに入るとスーパーの同僚の泰子が真っ先に時給2000円なら私もと名乗り出てきた。それが口コミで広がり25歳~30歳までのバツイチ女性で月曜日から土曜日までシフトが埋まっていた。おりしも好景気の年末ともなればカラオケスナックはどの店も千客万来で賑わっていた。尚美とマスターの真昼の情事は一週間から10日に一回は真っ昼間の店で励んでいた。だからと言って尚美はマスターに特別の感情はなくセフレに徹していた。

平成3年(1991年)の春になりさくらは4歳になっていた。この頃からこの好景気はどうもバブルではないかという論評が新聞紙面に踊っていた。やがて高騰を続けていた土地価格が下がり初めていた。しかし、木屋町や祇園の店では大手企業のサラリーマンが多いのかそんなに影響はなかったが、ローカルの繁華街の四条大宮周辺の店の客は大手企業の下請け中小零細企業の勤労者が多くてそれらの会社の倒産や廃業のニュースが連日流されていた。カラオケスナック「貴婦人」の売上げも年末の半分以下になっていた。

この夜の飲食店の昼間はあらゆる業者がマスターキーを持って酒類の配達や空瓶の回収、おしぼりから氷、花屋、清掃まで出入りするが、これは週始めの月、火に酒屋、花屋、終末の金、土にはおしぼり、清掃とマスターは商品を注文するので水曜日と木曜日は業者の出入りはなく安心して尚美と情事を楽しんでいた。マスターの直樹の妻の美智子は三条商店街の老舗の花屋さんの娘で今も軽四輪で花を夜の飲食店やスーパーの生花コーナーに配達している。

その美智子が花を配達していた木屋町や祇園の店も花屋に連絡しないまま廃業や夜逃げをする店が増えてきた。その配達した花はいつもは店に持って帰るが、何故か?虫の知らせなのか?その花を夫の店に活けようと思い3階の店にマスターキーを使って入った。店の中は何故か灯りが点いている、美智子は花を持ったまま奥のフロアーを見るとそこには真っ裸の男女が抱き合っていた。美智子はまさか?夫とは思わず、「すみません~どちら様ですか?」と、声をかけるとその瞬間に妻の美智子と分かった直樹は飛び上がり驚いていたが、現行犯で観念していた。

尚美は取り敢えずそこらに散らばっていたブラやパンティーとセーター、ジーンズをかき集めてトイレに駆け込んでいたが...妻の千恵子が、「あら、あんた、東友スーパーの里井さんじゃないの?、食料品売らないでカラダを売っているの~店長に売春婦を雇っているのかとってやる!」

それもそのはずで千恵子の実家の花屋も尚美がパートをしている東友スーパーに花のコーナーがあり、美智子は花を納入していたから顔馴染みでもあった。

尚美はトイレで震えていたが、奥のフロアーでマスターと千恵子が言い争いしている隙にトイレから脱出して家に帰っていた。尚美は家に帰っても何も手がかかず、午後4時にはさくらを保育園に迎えにいった。夕方になり父親が夕食のために家に帰って来るが...何もなかった振りをして父親は個人タクシーで夜の勤務についていた。やがてさくらを風呂に入れて寝かしたころマスターから電話があった。

マスターはあれから妻の父親、母親、それにビルのオーナーまで店に駆けつけてきた。妻は私と離婚して里井さんを裁判にかけて慰謝料をふんだくと息巻いている。実はあの店の名義は妻の父親で私は店を開業する時に父親から借りた200万円があるが、それを直ぐに返せ、返さなければこの店の賃貸契約を解除する。このビルのオーナーは父親の友人でそのオーナーは直ぐに工務店に電話して店の鍵の取り替えを頼んでいた。そうこうしているうちに妻の兄が中京区役所で離婚届けの書類を貰って持ってきた。私は無理矢理だが、その離婚届けにサインさせられた。

尚美は、  
「そうなの~私のためにすみませんでした」  
「いやいや、悪いのは私で尚美は何も悪くはない」  
「それでマスターはどうするの?」

「私はすぐに ATM で店の金を下ろしたが、それが 95 万円あった。それに家の近くのガレージに停めてあった私の軽四輪を持ち出してきた」

「マスター、そのお金は店の家賃、酒屋さん、カラオケのリース代、それに私と泰子、京子ら 5 人のアルバイト代ではないの?」

「それはそうだが、それを払うと私は無一文になる。この金を持って岡山の実家に帰る、実家には母が一人だが家賃も要らない、また一からやり直す」

「マ、マスター、私は奥さんから訴えられた上に私が紹介したアルバイトなのに、私は泰子らにどういう説明をすればいいの?」

「それは～すまん...」

「すまんですまないわよ～それに～もう、東友スーパーのパートにも行けないし...」

「すまない... 私は今から岡山に帰るが、また岡山から電話する」

「ちょちょちょ待ってよ、取り敢えず今夜はどっかに泊まって明日の朝 10 時に電話して」

「分かった...」

尚美が中学二年生の時に母親は不倫した男と駆け落ちして残された尚美は父親に育てられた。その父親にはさくらのお産の費用から別れた夫の借金 250 万円だけならまだしもさくらが 4 歳になる今日まで生活費のすべてを父親のタクシーの稼ぎで養って貰っていた。尚美がパートで貰う月々 6 万円程度の金もさくらのために使えと父親は受け取らなかった。その金で週一だが、飲み会に参加してその店で知り合った男と何回も不倫して相手の妻から慰謝料を請求されてもその金を父親に出してほしいとは絶対に言えない。そしてこんな世間の狭い京都の中京区では尚美の不倫は明日中に地域を駆け巡る、当然ながらさくらの保育園のママ友にも知れ渡るので昼間は表も歩けないし買い物も行けない、仮にさくらを連れて新天地を求めてもやはり金がある。父親からは「夜はウロウロするな、魔物が支配している」と何回も意見されていたが、それを無視して罰が当たったと悩みに悩んでも答えは朝まででなかった。

明るく日の朝、尚美はさくらを自転車で保育園に送り自転車から降ろす時にはさくらをいつもより力を入れて抱きしめていた。家では父親が個人タクシーの営業の用意をしていた。尚美は父親に、

「お父さん、悪いけど私今日どうしても用事があるの、だからさくらを午後 4 時に迎えに行って」

父親は毎度のことで嫌な顔をしないで頷いていた。

そして父親が出発したのを確認してから父親宛に置き手紙を書いていた。そして尚美は大きなバック二つに当面必要な下着から服、靴まで詰めてマスターの電話を待っていた。そして家の前でマスターの軽四輪にバック二つとともに尚美も乗りこんでいた。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 6話 さくら大きくなったら看護師さんになって爺ちゃんのお熱を...

小説老人と性 里坊さくら苑 6話 さくら大きくなったら看護師さんになって爺ちゃんのお熱を...

個人里井タクシーの運転手の里井和博は61歳になっていた。娘の尚美に4歳の孫のさくらを午後4時に保育園に迎えに行くように言われていたためにタクシーを保育園から少し離れた場所に停めて保育園に行った。保育士は和博の顔を見ると同時に、「さくらちゃん、お爺ちゃんのお迎えよ〜と〜」叫ぶとさくらは満面の笑顔で和博に飛びついてきた。

それもそのはずでお爺ちゃんのお迎えの時は必ず帰りには大手スーパーのゲームコーナーに連れて行ってもらえるからだ。

さくらを十分遊ばしてから家に帰ったが、まだ母親の尚美は帰っておらず居間のテーブルの上にはお父さま宛の封書があった。和博は胸の動悸で手が震えるのか震える手で手紙を読むとそこには、

「お父さん、私は母に捨てられてから今まで育ててくれていつも心から感謝しています。この度、私の不始末で裁判所へ訴えられることになりました。それまで私はお父さんに二度も三度も迷惑をかけてきましたが、もうこれ以上迷惑をかけることは出来ませんでした。もし弁護士や裁判所からなにか連絡がありましたら娘の尚美は勘当してもう家にはいないということで完全に無視して下さい。私は暫く姿を隠しますが、必ずさくらを迎えにきますのでさくらを宜しくお願い致します。尚美」

とあったが、さくらにはすぐにこのことを言う言葉がなく取り敢えずさくらにはお母さんは今夜は遅くなるから先に爺ちゃんにご飯を食べてお風呂に入ろうと言うとさくらは何も知らずに喜んでいた。

和博はさくらを寝かして焼酎のお湯割りを飲みながら尚美の手紙を読み返していた。この手紙では詳しいことは分からなかったが、和博の妻で尚美の母親の光恵と同じで妻子ある男と不倫してそれが周囲にバレてのやむにやまない駆け落ちだったが、尚美もそうだろうと判断していた。光恵は活発な女性で地域の体育振興会が主催する催しには積極

的に参加していた。週に一回の小学校の体育館でのママさんバレー、校庭でのテニススクールも夜に行われていた。

この学区の各種団体はそれぞれ友好を目的に忘年会、新年会、花見にBQパーティーなど年数回は開催されて二次会はカラオケと流れほどの学区も同じだった。光恵はテニススクールのコーチで小学校の教師の足立芳雄にほのかな好意を持っていたが、ある催しの二次会のカラオケでたまたま隣に座ったことから仲良くなっていた。やがてこの二人はw不倫になるが、この教師と光恵が乗った乗用車が南インターのラブホテルから出てきたのを同じく不倫をしていた娘の尚美と同級生の母親が発見して自分のことは棚に上げて体育振興会のメンバーに絶対に言わないでとペラペラ喋っていた。

それが校長の耳に入り足立は教育委員会からも呼び出しがあった。当然ながら足立の妻は離婚を決意して浮気相手の光恵を訴えると息巻いていた。この二人は駆け落ちするほどの愛はなかったが、二人で駆け落ちする道しかなかった。それから10年以上経つがこの二人の消息はわからなかった。和博はこんな事を思い出していたが、尚美も同じようなもので尚美は二度と家には帰って来ないとすると孫のさくらは自分が育てなければならぬと覚悟して布団に入っていた。

明るく日の早朝から和博は電話で姉二人に尚美の駆け落ちのことを報告していた。一番上の姉の和美は夫に先立たれて宇治で一人暮らしをしていた。二番目の姉の愛子は子供がいなくて向日市の持ち家で夫婦で年金暮らしで時々パートに出ているという。その両方がさくらを引き取りたいというのですぐに和博の家に来るといふ。そうこうしているうちにさくらが起きて母親を探していた。

和博はとっさにママは夕べ愛子おばちゃんの家で泊まって愛子おばちゃんと一緒に帰ってくるって言ったが、さくらは和博の電話を聞いていたのか寂しい顔をしていた。和博はさくらを自転車で保育園に送り家に帰るともう愛子夫婦と和美が家に来ていた。和博は姉に尚美の置き手紙を見せていたが、口の悪い和美は「本当にあんたの教育が悪いから妻の光恵さんから娘の尚美まで不倫のあげく駆け落ちというのは男として恥じゃあないの...」

愛子は、  
「なんぼ儲かるといってもタクシーの夜勤では光恵さんを抱けないから女なら誰でも欲求不満になるわよ!、それと尚美だって同じよ!、まだ若い尚美に夜ウロウロするなど強制したら誰だって反発するわよ!」

と、二人とも姉らしく弟の和博を遠慮なくこき下ろしていた。

和博は女の口には負けるから反論はしていないが、確かにタクシー運転手はバツイチが多い。大手の法人タクシー会社の单身寮はどこも満室だが、それは若い運転手用ではなく50～70歳のバツイチばかりでこれは個人タクシーも同じになる。その原因が夜勤勤務だと疲れもあり夜の生活がおろそかになるという愛子の説を自分でも思い当たるのか理解できていた。そこで和博は姉二人に、  
「わしはさくらをわしの手で育てようと思っている」

これを聞いた二人は口を揃えて、  
「和博、なにをいっているの!あんな、今まで料理どころか掃除、洗濯、家事の一つもしないと光恵さんがいつもこぼしていたのに、そ、それにタクシーはいつ運転するの?、夜勤でさくらを一人で寝かしておくの?夜中に熱が出たらどないすんねん～和博!」

和博は息巻いている姉二人に、  
「いやいや、タクシーは暫く代行運転手に任せる。これは個人タクシー事業主が病気や交通事故で運転出来ない場合は個人タクシーの免許取得者でまだタクシー車両を持っていない運転手に運転させる制度がある。その運転手とは売上げは折半で若手の運転手なら月に70～80万円は稼ぐ、だから私の収入は35～40万円にはなるが、ここから保険や車検等々を差し引いてもそこらのサラリーマンよりは収入はいい。だから料理や家事は姉さん二人に教われればさくらを立派に育てられる」

姉の和美が、  
「でも、その制度ってさくらがせめて中学生にぐらいになるまで使えるの?、それに和博だってもう年だし～いつまで運転出来るの?」  
「その制度は2年ほどだが、それまでに探偵事務所にでも頼んで尚美の居所を探して貰ってわしが尚美をさくらの元に連れて帰る。個人タクシーの定年は75歳でまだ14年は働ける、その後は政府の年金と個人タクシー年金で贅沢は出来ないが、さくらぐらいは養える」

愛子は、  
「そう...それなら私が当分毎日にここに通って和博に料理や家事を教えるが、さくらにこのことを誰がどんな説明をするのよ!まださくらは4歳よ!」

取り敢えず今夜はさくらの好きな料理をしようと和博からさくらの好物を聞いて和美と愛子夫婦はスーパーに買い出しに行った。和博はさくらを自転車でお迎えに行ったが、その保育園の保育士が和博の姿を見ると園長先生が和博に話があると園長室に案内された。園長はもう尚美がカラオケスナックのマスターとの駆け落ちしたのを知っているようで和博に、  
「さくらちゃんのお母さんが不在のようですが、さくらちゃんはまだ4歳ですから京都市の児童相談所に相談したらいかがでしょうか?、なんでしたら私の方から児童相談所に連

絡をして相談日を決めることも出来ますが…」

和博は、  
「ありがとうございます。さくらは私が育てます、それに私の姉二人が順番に毎日家に来てくれます。それに私も2年間は個人タクシーを休業しますから、私が毎日さくらを送り迎えしますから安心して下さい」

和博はさくらを自転車に乗せてからさくらに、  
「今日は和美おばさんと愛子おばさんがさくらの大好きなちらし寿司とミニハンバーグとウインナーとポテトフライを作ってくれるから家に帰ったら「ありがとう」って言ってネ～さくら」

さくらは小さな声でハイとは言っているようだが、なぜか?「お母さんは?」帰っているのかと爺ちゃんには聞いて来なかった。和博はこんな小さな子供でも周りの大人の会話から何かを感じているのかと涙が溢れてきた。

夕食の時間になり今夜は珍しく大人数の食事ですくらは大好きなちらし寿司の上に乗っている赤いエビが気に入ったようで和美からも愛子からもエビを貰って笑顔で食べてはいたが、何故か?「お母さんは…」という一言がでないから和美も愛子も和博もさくらにお母さんがいない理由を切り出すことが出来なかった。そして和美と愛子夫婦がそれぞれ家に帰ったのでさくらと爺ちゃんのお風呂タイムとなった。さくらは爺ちゃんとお風呂に入るのが大好きで週一回の爺ちゃんのタクシーが休みの日を楽しみにしていた。

風呂から上がるとさくらはパジャマに着替えて爺ちゃんに読んで貰う絵本を自分で決めて読んで貰っていた。さくらを寝かして和博はいつもは焼酎のお湯割りを飲むが、今夜は何故か安心したのかビールを飲みたくてビールを飲んでいると隣の部屋で寝ているさくらのむせるような咳が聞こえた。和博は部屋に入りさくらの顔を見たが、顔は火照っているようで急いで体温計を探して熱を計ると38度1分もあった。取り敢えずは冷凍庫に冷やしてある熱冷ましシップをさくらの額に置いていた。

和博は所属している京都個人タクシー配車センターに電話をしていた。  
「はい～里井さん～お疲れさまです～どうしました～」  
「わしの4歳の孫が38度1分の熱がでた!深夜にやっている緊急病院で小児科の先生がいる病院を大至急探してほし、それと里井タクシー営業所までタクシーを配車してほしい」  
「わかりました、大至急手配します」

里井タクシーが所属している配車無線は450台が加盟している。無線オペレーターは、  
「全車に連絡、里井さんの孫4歳が急病、大至急小児科の先生がいる急病診療病院を当

たってほしい」

各無線局からの「198 了解」「321 了解」の声を打ち消すスピードでたまたま京都市立病院急病受付で客を降ろしていた運転手が病院に駆け込んで小児科医の確認と急病患者の搬入を許可して貰っていた。

和博はさくらを毛布に包んで家の外にでると個人タクシーがドアを開けて待っていてくれた。この運転手も無線を聞いていたので京都市立病院に向かったが、この時に里井は行き先の病院を知った。この個人タクシー仲間の見事な連携ブレーに心から感謝をしていたのは里井だけでなく毛布に包まれたさくらも同じだった

タクシーが京都市立病院の急患入口に着いたがもう女性の看護師が待っていて和博に抱かれてタクシーから降りたさくらを毛布のまま抱き抱えて走るように診察室に入った。若い看護師はベッドに寝かしてからさくらに、  
「可愛いね～名前はなんていうの?」

さくらは蚊の鳴くような声で「さといさくら、4さいです」と答えていた、看護師は、「さくらちゃん～いいお名前ネ～そう、そう、吐きたかったら遠慮しないで吐いてネ～お熱を計りま～す～これが終わったら先生にポンポンを診て貰ってお薬を飲んでお熱が下がったらお家に帰れますからネ～」

さくらはこの看護師をまじまじと見ていた。保育園の先生も優しく綺麗だが、この看護師さんは少し濃い目の化粧で髪型もキャンディーキャンディーに似て金髪、それに小児科診療室なのか白衣もピンクでまだ4歳のさくらでさえ綺麗なお姉さんと感じていた。

やがてさくらの熱も平熱近くまで下がり家に帰る許可がでた、医師は和博に、風邪ではないが、なにか急激に周りの環境が変化すると脳がついていけずいわゆる知恵熱かもわかりません。もし明日も熱が出るようでしたらこの病院の小児科で診察を受けて下さい。

帰りもさくらは毛布に包まれて個人タクシーに乗っていた。そして爺ちゃんに、  
「爺ちゃん～さくらが大きくなったら看護師さんになりたい」  
「そうか～そうか～でも、看護師さんになろうと思ったら一緒懸命勉強をしなければなら  
ないが、さくらはできるかな?」  
「できる、できるよ～看護師さんになって爺ちゃんが病気になったらさくらが爺ちゃんのお熱を計ったげるよ～爺ちゃん」

爺ちゃんは溢れる涙をさくらにも個人タクシーの運転手にも悟られないように苦労していた。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 7話夫の浮気は妻にも責任がある というが...・さくら小学一年生に

小説老人と性 里坊さくら苑 7話夫の浮気は妻にも責任があるというが...・さくら小学一年生に

さくらの母親が浮気相手の男性と駆け落ちしてからまだ4歳のさくらと爺ちゃんと二人きりの生活が始まって一ヶ月になるが、さくらは爺ちゃんに母親が家にいないことを聞くのは何故か?遠慮していた。ただ、爺ちゃんの姉二人が交代で昼間は毎日家にきて爺ちゃんに料理や洗濯、掃除など家事を教えている。さくらは姉の70歳の和美と気が合うようで土曜日の夜は宇治の姉の家に泊まりに行っていた。さくらと姉は年の差66歳もあるが、そこは女同士でさくらの母親の尚美のことを話合っているようで爺ちゃんもそれなりに安心していた。そしてさくらが姉の家に泊まりに行く夜は爺ちゃんも近所の居酒屋の好きなママさんに通ってそれなりの息抜きをしていた。

和博の行きつけの居酒屋は和博より三つ上の64歳の泰子ママか一人で切り盛りしているカウンター8席のみの小さな店になる。この泰子ママは年よりは若く見える色白美人の上、料理の天才で魚の煮付けやおでんは昔風だが、客も昔人間ばかりで近所の商店主や年金暮らしの老人で平均年齢も74歳ほどで和博は若い客の筆頭だった。口の悪い京都人はこの店のことを「爺捨て山居酒屋」と揶揄するほど老人の憩いの居酒屋になっていた。

元々この店は泰子の姉が経営していたが、姉が若年痴呆症になって老人施設に入所してからバツイチの泰子が店をついで10周年になる。和博は姉か店をやっている頃からの客で素人の泰子になにかとアドバイスしていた。和博と泰子はもうとっくに男と女の関係にはなっていたが、それは愛人でも恋人でもなく気の合う酒飲み友達になっていた。それ故、泰子とのセックスは半年に一回ほどでその時は二人とも燃えていた。

和博はこの泰子ママに娘の尚美が男と駆け落ちしてからなにかと相談していた。泰子ママも夫の浮気で離婚しているので尚美の場合とは真逆の不倫離婚にはなる。泰子は、

「私も夫の不倫を知って逆上して相手の女性の勤務先に押しかけたり、弁護士に頼み夫と浮気相手の女性から慰謝料を取ろうと思っていたが、この二人が失踪して行方不明になってお金は取れなかった。結局残ったのは相手の三人のお子さんの不幸と私と子供二人の子育ての苦労だけだったが、もし私が夫の浮気を許していれば少なくとも五人の子供の不幸を救えたのにと今では後悔しているは、それに夫の浮気の原因は私にもあったから相手の方の旦那さんへの責任は私にもあるの」

和博は、

「いやいや、悪いのは浮気をした男と女で泰子は何も悪くはない!」

泰子の夫は大手セメント会社の直系の生コンクリート工場のプラントのオペレーターをしていたが、生コン工場の朝は早くて出勤は早朝の6時だった。そうすると泰子は朝の5時には起きなければならない。そしてまだ小さかった子供の世話を学校に行かせていた。泰子は専業主婦だったが、学校行事や長男の野球クラブのお手伝いに忙しく自分の時間を持てるのは子供が寝た午後10時頃だった。泰子はこの時間からの連続テレビドラマが唯一の楽しみでこれを観てから風呂に入れば深夜12時前後になり、また朝の5時には起きなければならなかった。

一方、夫が会社から帰って来るのは早くて午後7時にはもう酒を飲みながら野球を観たりだが、朝が早いので午後10時には風呂も入り布団に入るが、その時に夫は泰子と一緒に寝よとセックスの催促をしてくるが、泰子にすればこの時間からが楽しい時間でその催促を断っていた。そうなれば夫婦喧嘩の始まりで、

夫は、

「わしは一緒懸命働いてお前らを食わしているのになんでやねん!そんなにテレビが大事か!」

泰子は泰子で、

「私も一緒懸命働いているのは同じや~私の唯一の楽しみを邪魔しないで...」と無下にもセックスを拒否していた。

そして夜中に夫がなにかで眼を覚まして隣に寝ている泰子の胸を触りに来るが、泰子は寝入りばなでその気分には到底ならずセックスをこれまた拒否していた。

そんなことが数年続いたが、夫は会社帰りに同僚らと居酒屋で一杯飲むのが日常になってきた。そこで私は、

「お父さん、毎日毎日飲酒運転をしていたらしまいに交通事故を起こして逮捕されますよ!」

夫は、

「いやいや、まだ宵の口だから飲酒の検問はしていない、それにわしの小遣いで飲むのが何が悪い!」

と、喧嘩ばかりしていたが、やがてその居酒屋でパートで働いてた50歳前後の既婚女

性と不倫してその女性の夫が妻の不倫を発見して私の家に怒鳴り込んできて夫の不倫が発覚したの。その3日後にはこの二人は精神的に追い込まれて和博さんの奥さんや娘さんと同じで二人で駆け落ちしてしまったは...結局のところ夫は長年勤めた大手セメント会社を無断欠勤の懲戒解雇で約一千万円の退職金まで失い、不倫相手の女性は3人の子供と生き別れて誰も幸せにならないばかりか不幸ばっかしよ」

黙って泰子の話を和博が聞いているとさらに泰子は、  
「今から考えたら私がテレビばかり観ていたのがすべての原因で夫のセックスはたかが10分ほどで長くても15分、テレビを少し我慢してさっさと夫を満足させてからゆっくり観るとか、ビデオで録画して昼間に観ていれば睡眠も取れるし健康なのに私もその時は自分は絶対に正しいと信じていたが～まさか夫とのセックス拒否がこんな不幸の大量生産をするとはと毎日後悔する日々...」

和博は、  
「ま～すべての責任は泰子にないにしても夫婦でセックスの話をする機会がないから女は男の性を理解しない、男は女の性が理解できない。今後、男女同権や男女同一賃金などの女性解放運動が進めば女性は男の勝手な性的欲望から解放されるという評論家もいるが、それでは性の不一致が増えるばかり、それよりなにより結婚する前にお互いセックスのルールを決めとけば私は不毛の不倫も離婚も無くなると思っている」  
「そうよね～私達は貴重な体験をしたは、でも私はこうして和博さんと知り合いになって喜んでます。そ、そ、私たちのセックスのルールは覚えていますか?和博さん」  
「そら～覚えているよ!どちらかがセックスをしたい時は合図するが、それがイエスでもノーでも心から優しく丁寧な返事をするだろう?泰子...で、今夜はさくらもいないからどう?」  
「もちのろん Ok よ!和ちゃん」

さくらの母親が失踪してから二年が経ってさくらはピカピカの小学一年生になっていた。爺ちゃんの姉二人から贈られたランドセル姿で小学校の校門前の満開のさくらの下での記念撮影は和博も姉の和美、愛子もそれに失踪したさくらの母親の尚美もすべて同じ朱雀小学校でこの入学式の記念撮影を経験していた。古い京都の中京区の仕来りて小学校の入学式には家族はもちろん親戚縁者一同が小学校入学を祝うために家に集まってくれるが、姉の子供3人の夫婦や孫6人までの誰一人もさくらの母親である尚美の話題に気を使って触れないことが反対にお祝い駆けつけてくれた人の涙を誘い、その涙をさくらに悟られないように苦労していた。さくらも皆んなが気を使っているのを知っているのか?お母さんの事には一切触れなかった。

さくらが小学校に入ると同時に個人里井タクシーの2年間の休業期間が満了していた。爺ちゃんは朝6時には起きてさくらとの朝ごはんを作り、さくらが学校への集団登校を見送ってからタクシーを運転していた。さくらの下校時間や学童保育の終わる時間には

姉二人が交代で家にいてくれた。それから姉はさくらを連れて夕飯の買い出しや料理と一緒にしていた。爺ちゃんは午後6時には帰ってきたが、ここで姉とバトンタッチして姉らは自宅に帰っていた。この爺ちゃんの昼間勤務の売上げだが、まだまだバブル崩壊したと言われていた頃だが、さくらとの生活費には余裕があった。

さくらとの夕食が終わると二人で後片付けしてからテレビを観たりしてからさくらと風呂に入りさくらは奥の部屋で一人で先に寝ていた。これからが爺ちゃんの時間で焼酎のお湯割りを飲むのが日課だった。それから4年経ちさくらも5年生になっていた。さくらは素直な性格でスクスク育ち身体も女らしい丸みをおびてきた。もう5年生にもなれば生理が始まるかとも思いさくらに、「さくらも5年生にもなったからお風呂は一人で入ったらと」爺ちゃんはやんわりいうが、さくらは、「ダメ!爺ちゃんが入る〜!」  
というので姉の和美にさくらを説得するように電話をしていた。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 8話 さくら初潮、大文字駅伝入賞・MK タクシー値下げの陰、失踪、自己破産、自殺続出

小説老人と性 里坊さくら苑 8話 さくら初潮、大文字駅伝入賞・MK タクシー値下げの陰、失踪、自己破産、自殺続出

和博が個人タクシーの営業が終わった午後6時過ぎに家に帰ると珍しく姉の和美の長女とその娘、つまり、和美の孫の中学生三年の真希が来ていた。それに姉の愛子でお客様は女性ばかり4人でテーブルの上にはお赤飯とデコレーションケーキにさくらが大好きな豪華版のちらし寿司が並んでいた。さくらは6年生になったばかりだが、さくらの誕生日は3月3日でもう終わっていた。和博は孫のさくらが顔を赤く染めているのと赤飯を交互にみてさくらの生理が始まったことを悟っていた。

女5人と爺ちゃんのお祝いはいつもはさくらと二人きりの夕飯だが、今夜は飛びきり賑やかで爺ちゃんもいつもの焼酎から姉が持ってきた赤ワインを飲んでいて。祝宴が半ばになると和博の姉の和美が、

「さくら、生理の手当てでなんかはこの真希になんでも聞いたらいい、この真希はおませなのか小学4年から生理が始まったベテランだから」

と本来はこの仕事はさくらの母親がするものだが、皆んなが気を使ってくれているのがさくらには痛いほど分かっているから、さくらは、

「ありがとう～真希ちゃん、なんでも相談します」

そこで和美が、

「さくら、あんた、まだ爺ちゃんとお風呂に入っているの!さくらはもう立派な大人よ!」

「はい、和美おばちゃん、生理中ではありません」

「いやいや、さくらそうではなくて、いつも入ってはいけません」

さくらは珍しく和美に反論をしていた、

「私は爺ちゃんをさくらのお父さんとお母さんと思っていますから爺ちゃんとお風呂に入るのはお母さんとお風呂に入っているのと同じです」

「そうなの～いやいや、そうではなくお爺ちゃんも立派な男よ!さくら、それに爺ちゃんも困っているのよ!さくら」

「なんで?爺ちゃんが困っているの?」

「だって...爺ちゃん、目のやり場に困るじゃないの!さくら」

「私は爺ちゃんに4歳からお風呂に入れて貰っているからどこを見られても恥ずかしくはないよ!」

そこで愛子が、  
「まあ～さくらの気持ちも分かるので小学校生までにして中学生になればさくらのほうが恥ずかしくて爺ちゃんが一緒に入ろうと言っても断わるからそれを待ちましょう」  
とさくらに助け船を出してくれた。

さくらは部活には陸上部とパソコン部を選んでだったが、爺ちゃんから母親の尚美もピアノ教室とバレエ教室、それに学習塾にも通っていたのでさくらも好きな教室を選べと言われていた。しかし、さくらは爺ちゃんになるべく負担をかけないように部活で放課後をすごしていた。さくらが選んだパソコン部は教師から将来パソコンをできなければ看護師など国家試験の必要な仕事には就けないと言われて入部していた。まだパソコンは家庭には普及していなくて朱雀小学校には職員室に1台、教材として1台のみでパソコン部を指導する先生でさえワープロができるという理由だけで選ばれていた。そんな環境でもさくらは本屋のパソコン本を立ち読みしながら独学で勉強して職員室のパソコンまでも動かして先生たちが反対にさくらにパソコンを教えて貰っていた。これが塾や習い事をしていればこんな時間はさくらにはなかった。

さくらのもう一つの部活は陸上部だが、この陸上部を選んだ理由は爺ちゃんにあった。爺ちゃんは高校の陸上部で活躍した後に陸上の実業団チームのある大手の自動車会社に就職してそのチームの駅伝選手となった。爺ちゃんが酒を飲みながらさくらに自慢していたのは21歳の時に京滋読売国際駅伝で当時有名だったオリンピックメダリストの選手も参加した駅伝でアンカーとして走り8着で入賞したことだった。さくらはこの話を何回も聞いて私も陸上部に入って駅伝で入賞すれば爺ちゃんが喜ぶと思ったからだ。

さくらは朱雀小学校の6年では一番足が早くて京都市小学校対抗大文字駅伝の中京区の予選を通過して大文字駅伝に出場することになった。この駅伝は京都市内の小学校の48校が地区予選で選ばれる駅伝になる。さくらの朱雀小学校チームは予選の成績からは20位前後の下馬評で到底入賞はど遠かったが、さくらは爺ちゃんを喜ばそうと作戦を練っていた。

駅伝当日には爺ちゃんの応援の場所をゴールの錦林小学校手前50メートル手前にある岡崎稲荷神社の赤い鳥居前に指定していた。これはさくらがアンカーで走るコースになり下馬評の20位から8位入賞するには12～13名を抜かなければならないが、さくらはこれには自信があった。レースは男女8名で8区間で争われてさくらは7区の選手からたすきを受け取ったのは予想通り20位だった。さくらが走って来るのを待ちながら爺ちゃんは目の前を走り抜ける選手を数えていたら8番目の選手の後方からゼッケン25番

のさくらが余裕の笑顔で爺ちゃんを探して目が合った瞬間にさくらは前の選手を抜いて8位入賞と区間賞を爺ちゃんにプレゼントしていた。

その夜には地元のKBS京都が大文字駅伝の録画中継していた。48チーム全員のダイジェスト版で特に8位入賞までの入賞ゴール選手の瞬間を撮っていた。さくらは笑顔のVサインで写っていた。また、明るく日の京都新聞では「大文字駅伝川西小初優勝」の大きな見出しの下には「アンカー12人抜きで区間賞、8位初入賞、朱雀小里井さくら」の記事とさくらが8区で第2集団をごぼう抜きしている瞬間の写真が掲載されていた。爺ちゃんは喜んで京都新聞を30部を買って仲間の個人タクシーの運転手やなじみの乗客などに「わしの孫」やと配っていた。

その同じ新聞の三面にはこれも大きな見出しで「個人タクシーノーブレーキでコンクリート壁に激突炎上死亡事故か自殺か」の記事が、読むと和博と同じ個人タクシー協同組合に加盟している「大塚タクシー」だった。和博はすぐにこれは自殺と判断していたが、もう京都の個人タクシーだけでも18名の自殺者、法人タクシーの運転手もそれぐらいたか、法人タクシーの運転手は借金を踏み倒しの失踪が多くてそれは第二種免許さえあれば日本全国どこのタクシー会社の单身寮に入れるからだ。中には家賃が払えず企業内ホームレスが大流行で夜勤の後会社の風呂に入り、仮眠室で寝てまた夜勤の勤務になるが会社も知らん振りをしていた。

この原因は1991年頃からのバブル崩壊でタクシーの売上げが減っただけではなしに94年7月からのMKタクシーの値下げとMKタクシー関連でMKタクシーを褒めたたえるニュースが連日テレビで垂れ流されて京都市民はもちろん観光客までもMKタクシーに乗るために目の色が変わるほどMKタクシーの大ブームになり個人タクシーの昼勤務は一日10時間流しても売上げは1万円程度にまで落ち込んでいた。個人タクシーはまだしも法人タクシーは40%の歩合給で時給は400円程度(当時法定最低賃金677円)年収120万円~150万円程度では家賃も払えず大手消費者金融に走るしか手はなかった。

やがて大手消費者の利息も払えずタクシー運転手相手の悪質闇金融から借りることになるが、その先は失踪か自己破産か自殺しか道はなかった。正義感の強い里井和博はこの現実を地元の京都新聞、全国紙4社、それにNHKにも手紙で訴えたところ手紙を差し出したすべてのマスコミから返事があり記者から取材を受けていた。その中のNHKの記者は東京本局から来てくれた。その記者全員に和博の作成した個人タクシー、法人タクシーの現状をありのまま書き、また法人タクシーの給料明細や乗務時間のタコグラフなど5名分の証拠などのコピーを渡していたが、記者のすべてがすごい内容に驚いて必ず記事にすると和博に約束していたが、3ヶ月も経ったがどの新聞社もNHKも、そ

して新聞社系列のテレビ局も取り上げなかった。

そこで全国紙の記者に電話するとその記者は里井の家に来てくれた。記者は社会部の小林記者で、里井に、

「里井さんの作成した訴えの裏付けをしました。まず、京都駅で客待ちしている運転手さん5名に現状を聞きました。さらに深夜祇園で客待ちしている運転手さん5名にも取材しましたが、これは里井さんの指摘通りで私もこの現実にショックを受けました。そして京都労働局に取材するとたしかにタクシー運転手さんが個人的にある法人タクシー会社は最低賃金と残業代の未払い、それに長時間労働勤務の訴えが今年だけで10数件あったが、すべての会社に是正勧告及び指導をして会社は訴えた運転手さんに2年間の未払い賃金として約30万円～80万円を支払い解決しているそうです」

里井は、

「たしかに未払い賃金は貰ったが、その16名は会社からも労働組合からもいじめ抜かれて会社を辞めています。京都タクシー協会とタクシーの労働組合の全自労京都府本部からブラックリストを作られて京都府内のタクシー会社に面接でボイコットされてタクシー会社に最就職もできずに失踪、自己破産、自殺の道を選んだ運転手が大半になります」

小林記者は、

「いや、それは私も初めて聞いたが、その京都府タクシー協会と全自労京都府本部にも裏付け取材しましたが、タクシー協会は京都のタクシーで最低賃金以下、残業代未払いのタクシー会社は1社もない、もしあるとするとその運転手が勤務中にパチンコや競輪、競馬に麻雀をしているから売上げが上がらないから当然貰う給料は最低賃金以下にはなるが、そんな運転手がタクシー会社には1人や2人はいるが、そいつらが、京都労働基準監督署に訴えただけで京都のタクシー会社のただの1社も労働基準法には違反していないといていたが、これはどんな業界団体でもやる常套手段で私達記者はこの会社と業界団体のウソを見抜くことが仕事だと思っています」

(9話につづく)MK タクシー値下げの光と陰

## 小説老人と性 里坊さくら苑 9 話 MK タクシー値下げの陰 2・ 爺ちゃんさくらに MK 打倒秘策を教わる

小説老人と性 里坊さくら苑 9 話 MK タクシー値下げの陰 2・爺ちゃんさくらに MK 打倒秘策を教わる

さらに小林記者は続けて、

「京都のタクシー運転手さんが最も多く所属している京都労働会館の全自労京都本部の前川末吉執行委員長に取材したか、前川委員長も京都タクシー協会とまったく同じように京都のタクシー運転手で最低賃金以下や残業代未払いの運転手はただの 1 人もいないと前置きした上で私達全自労は革新党と協力協同の関係で革新党の幸田賢二衆議院議員にもし京都のタクシー運転手の生活と権利が侵害されたら直ちに国家で追求していただくが、私(記者)さんの言われる最低賃金違反や残業代未払いの事案は絶対にないと断言しています。里井さん、どこの労働組合でも御用労組でない限り、その業界協会とは対峙して戦っているが...全自労は革新党系労組で間違いないのか?」

里井は、

「大昔から全自労は革新党支持労組で委員長の前川氏は革新党京都府委員会の幹部で党内の交通労働対策部会の責任者でタクシーばかりかトラック労組の全自運、京都市交通局労組内の革新党組織を指導する立場ですが、この各労組、また配下の下部労組には革新党の支部(細胞)があり、革新党の集票機関になっています。そして京都のタクシー会社には全自労が組織している 32 のタクシー会社があり、それぞれの労組支部に専従や半専従、または闇専従の労働貴族がそれなりの甘い汁を吸っています。つまり、この問題が記者さんのスクープで社会問題になればおそらく 32 のタクシー会社の半分は潰れます。そうすると革新党の細胞の支部の半分も潰れます、それに革新党の党員や支持者が多い労働貴族も失業します。この会社が潰れて困るのはタクシー会社だけでなく革新党も労働貴族も同じですからタクシー協会と全自労組と革新党は協力協同の美名の元にグルになったのです。それを組合員に悟られないように全自労は「MK タクシーの値下げ反対」のタクシー会社の協力を背景にタクシー車両を全自労に貸し与えて国会にタクシーデモをしたが、その国会には革新党の幸田賢二衆議院議員が待っていた。このタクシーデモはマスコミも大きな記事にして全自労があたかも京都のタクシー運転手の生活と権利を守るというイメージを与えたが、本質は悪質なタクシー会社と革新党の組織、そこには

びこる労働貴族の生活と権利を守るパフォーマンスでこの日もあるタクシー会社の運転手が会社の单身寮で首吊り自殺をしていた」

小林記者は里井の話を青ざめた表情で真剣に聞きメモを取っていたが、「私も社会部記者として幸田議員には何回も取材していますが、真面目な理論家と感じていましたが...」

「その通りですが、しかし、幸田議員は京都大学生時代からの党员だが、なにせお坊っちゃま育ちの上に世間はまったく知らない。そんな幸田議員がたとえば党中央本部の幹部としても海千山千の労働組合の党幹部からすれば赤子の手をひねるほど簡単に操れます。革新党はピラミッド型の組織ですから全自労の内部の党組織からの情報しか信用しない。今回の問題でもたとえば私が幸田議員に直接実情を訴えても、幸田議員が全自労の党幹部に事情を聞いたら党幹部が「京都のタクシー運転手には最低賃金以下、法定残業代未払い、長時間労働に該当するタクシー労働者は1人もいない」と答えれば幸田議員はそれを信用するしかない、つまり、真実は闇の中に消えてしまいます」

小林記者は、「今回の里井さんの訴えが我社でも各マスコミでもなかなか記事に出来ない理由はこの問題の社会的なウラが取れないからです。この社会的ウラとは京都のタクシーを代表する労組、つまり、全自労がこれらの事案を認めなければなかなか記事には出来ないと我社の編集長も各社の編集長も記者が集めた原稿記事を新聞に掲載出来ないと悩んでいます。これは私が京都労働局に取材した時も労働局は最低賃金法違反、残業代未払い、長時間労働の訴えが全自労からないのでやむなく個人的に訴えてきたタクシー労働者しか救済できないのと同じで全自労は悪質タクシー会社の防波堤になっているといていた」

里井はこの問題がなかなか記事にならない理由を聞いて納得していた。そして、「小林さん、色々お手数をおかけしてありがとうございました。私達の個人タクシーの協同組合や京都個人タクシー連合会の役員選挙でも各派閥や革新党のシンパで熾烈で醜い権力争いがありますが...やはり人間の性ですかね...」  
「でもね～里井さん、里井さんの真実の資料は全国紙の記者から傘下のテレビ局の記者まで浸透しています。今後、MK タクシーの青木会長がマスコミ各社に提供する話題の「光と陰」を検証しますので今までのように MK からの一方的なニュースを垂れ流しにはしません。我々もこの件では MK の青木会長のマジックに操られたことを反省していますから」

さらに小林記者は、「里井さん、MK タクシーから客を奪い返えすことをテーマに個人タクシーの有志で何か

いいアイデアを考えませんか?。もう、MKが悪い、全自労が悪いという他人事ではなく自力で個人タクシー発展の道を探りませんか?。もしあれば私が全国版の記事にします」  
小林記者はこの言葉を残してこの事件の幕となった。

さくらは中学生になっていた。中学でも部活はパソコン部だが、この朱雀中学校ではさくらが入学と同時にパソコン部が開部されてさくらはパソコン部のキャプテンになっていた。指導する先生や新しく入部してきた二年生、三年生までもさくらにパソコンを教えてもらいながらのクラブ活動だが、体育系以外のクラブでは一番の人気で部員は50名の大所帯になっていた。

さくらが中学生になった機会に爺ちゃんはさくらとの夕飯時に焼酎の晩酌を飲むようになっていた。今まではさくらを寝かしてからの晩酌だったが、さくらも宿題や勉強の時間も増えたのか夜ふかしするようになっていた。さらに今まで爺ちゃんの姉二人が交代で夕飯を作っていたが、土曜日と日曜日の夕飯はさくらが担当していた。爺ちゃんが早い時間に晩酌を飲みだしてからのさくらとの会話も大人じみた会話になり爺ちゃんもさくらを相手に MK タクシーの一人勝ちのグチなどもさくらに聞いてもらいストレスを発散させていた。

この日の昼間は全国紙の記者が来た日で爺ちゃんは記者との話をさくらに聞かしていた。爺ちゃんは、  
「記者は MK タクシーから客を取り返すのが、個人タクシーとわしの使命だとふざけたことを抜かしやがって何かアイデアを考えたら新聞に載せたとというが、学歴もないわしに何ができる!ほんまにあいつらは無責任なやつらだ!

これを聞いていたさくらは目の色が変わり、  
「じ、爺ちゃん、ようするに爺ちゃんのタクシーにお客さんが増えたら結果的に MK タクシーの客が減るといことなん?爺ちゃん」  
「ま、ま、ま~さくら、そういうことになるが、客を増やそうと思って考えているのは全京都個人タクシー協組も京都タクシー協会も考えているが MK の青木会長に全戦全敗で歯が立たない」  
「そうなん?、でもタクシーの台数では MK なんてたかが 10% でしょう?、90% のタクシーが何故負けるの?」  
「そ、それは MK の運賃が 10% 安いことと接客サービスがいいことにつきる」  
「それなら爺ちゃんのタクシーも 10% 値下げしてサービス満点にしたらお客さんは乗ってくれるよ爺ちゃん」

まだ中学一年のさくらにあっさり論破された爺ちゃんは目の玉が飛び出すほどのショックを受けた。この京都には MK 以外の運転手は約 2 万人にほどこいる。MK 憎しで団結しているが、ただの一人の運転手もさくらが指摘した 10% 値下げもサービス満点こそが、MK タクシーに勝てる唯一の方法だとは言えなかったからだ」

爺ちゃんは焼酎を飲むのを忘れてさくらの話を聞いていた。さくらはさらに、「ウインドウズ 95 の日本語版が販売されてもう 4 年になるけどそれで各家庭にもパソコンが入ってきたの、それにノートパソコンはまだ高いけどディスクパソコンは安いのは 15 万円程度であるので爺ちゃんが私にパソコンを買ってくれたら私が「里井タクシーのホームページ」を作ったげる。それで全国からの京都観光客の貸し切り客を増やせばもう MK の悪口もいう必要がないから爺ちゃんの血圧も下がるよ!爺ちゃん!」

爺ちゃんにはウインドウズやホームページの意味は分からなかったが、いつもわしが焼酎を飲みながら MK の話をしていたが、純粋な 13 歳の女の子には単なる「MK の悪口」にしか理解されていなかったのかと思うと恥ずかしくなっていた。たしかに全国紙の記者やさくらが言う「MK タクシーから客を取り返す」には MK の悪口を 100 万回言うよりもまず自分が立ち上がらなければならないと思わされたのか何となく MK 打倒の勇気が湧いて来るような気がしていた。爺ちゃん古希 70 歳、さくら 13 歳の春でした。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 10 話 MK タクシー値下げの陰 3・さくら 13 歳でN PO 法人設立へ

小説老人と性 里坊さくら苑 10 話 MK タクシー値下げの陰 3・さくら 13 歳でN PO 法人設立へ

さくらは爺ちゃんからディスクパソコンと複合コピー器を買って貰って大手旅行会社の京都観光案内のホームページをくまなく閲覧していた。そして京都のタクシー会社のホームページを探したが、まだ MK タクシーのホームページしかなかった。そのホームページにはおそらくプロのカメラマンが撮影したと思われる京都観光スポットの四季の写真が溢れていた。そして京都観光案内をするドライバーは社内の京都観光の講習会で優秀な成績ばかりのドライバーを集めた MK 観光部のドライバーが京都観光案内をいたします。貸切りタクシーを予約されたお客様はガイド料無料で貸切り料金も京都のタクシーより 10% 安いとあった。

さくらはこの MK タクシーのホームページを見て正直京都の 90% のタクシーがわずか 10% の MK タクシーに負けた理由は MK タクシーが運賃 10% 安いだけではないということを知っていた。さくらは個人タクシーの爺ちゃんをもう何年も見ている。爺ちゃんは普段はラフな私服で街を流している。たまに年に数回はネクタイにスーツ姿だが、黒いネクタイの時はお葬式での焼き場への貸切りタクシー、色のネクタイの時は観光客の貸切りで葬式は葬儀会社と個人タクシー協組から観光貸切りは旅行会社と個人タクシー協組から正規運賃の 20%~25% を斡旋料を取られると爺ちゃんはいつもグチっていたのを知っていたからだ。

まだある、さくらは友達らと四条河原町や京都駅に遊びに行くが、その先々には必ずタクシー乗り場があり、さくらは爺ちゃんのタクシーをいつも探していた。そのタクシー乗り場でたむろしている個人タクシーの運転手のほとんどが、だらしない私服のノーネクタイでタクシー社内でも外でもタバコをプカプカふかして吸い殻を道路にポイ捨てしているのを何回も目撃している。そして爺ちゃんのタクシーもタバコ臭かった。さくらはホームページよりもまず爺ちゃんを接客業としての教育が必要だと思った。

夕方の7時に爺ちゃんが家に帰ってきた。さくらはパソコンの前に座ったままで爺ちゃんに、

「爺ちゃん～パソコンがつながったから見て～」

爺ちゃんはパソコンの前に座り画面を見るとそこは「MK タクシー」のホームページで爺ちゃんの顔が少し曇ったが、さくらはそれを無視して、

「爺ちゃん、これからはインターネットの時代なのに京都のタクシー会社でまともなホームページを作っているのはMK タクシーだけです。予約のページを見ると3ヶ月先の10月、11月の予約はほぼ80%は埋まっているよ～爺ちゃんは予約の一つでも入っているの?」

爺ちゃんはこのさくらの言葉にある光景を思い出した。この春の観光シーズンではどのホテルでも早朝からMK タクシーの観光貸切りタクシーが宿泊客の出てくるのを待っている。その台数も平日なら1～2台、土日なら6～8台だが、京都には一流と言われるホテルか約10数軒あるが、どのホテルも同じでこの光景はまだMK がこんなに人気がない時はここに個人タクシーがずらりと並んでいた。爺ちゃんが個人タクシーを営業し始めたころは市民からは個人タクシーが絶対的な信頼と支持があったが、それが今まではMK に取り変わっていた。

さらに爺ちゃんは今日のことを振り返っていた。今日は10時間働いて水揚げは1万1千円だがこれでもいい方だった。走っても走ってもMK タクシーを待てる客は多いが、個人タクシーや法人タクシーを待つ客はいない。やむなく京都駅で並ぶが、京都駅に客を乗せて入って来るタクシーの10台のうち、5台はMK タクシーだった。つまり、たった10%のタクシー台数しかない会社が乗客の50%を輸送している現実を改善しようとしている我が孫のさくらを爺ちゃんはまじまじ見ながらここはさくらに素直になろうと決心していた。

さくらは爺ちゃんをパソコンの前に座らして爺ちゃんの右手をマウスに置いてその上からさくらの手の指でポイントを動かしながらポイントを画面左の窓の一番上に合わせて「秋の観光スポットモデルコース」を左クリックでポチリと押すと画面が一瞬に変わっていた。そこには4時間コース、6時間コース、8時間コースと料金まである。その下には「観光ドライバー紹介」や「お薦め昼の京懐石、夜の料亭懐石」「お薦め京土産」まであった。爺ちゃんはパソコンの画面を見たのは数回あるが、マウスを触ったのは生まれて初めてでかなり興奮していたが、爺ちゃんは約5分で自力でポイントを窓に誘導出来るようになっていた。

さくらは爺ちゃんをパソコンの前に座らしたままあらかじめ作ってあった料理を温め

たり、爺ちゃんの焼酎のお湯割りを作ってから二人の夕食が始まった。さくらは、  
「今日はパソコンが開通した記念に爺ちゃんが大好きな若狭の笹カレイにしたけど骨に気をつけてネ」

「ほう、これは大きいが、高かっただろう?」

「まあ～ネ、それより MK タクシーのホームページを見ての感想は?」

「う～ん... なんともいえない気分だが、腹も立たなくなった、もう、京都のタクシーは MK に完全に負けている」

「そう?でもね～私が MK よりもっとおもしろい爺ちゃんのホームページを作ったげるから安心してネ」

「まさか、さくらがパソコン部だとは知っていたが、あんなものを作れるなんて夢にも思っていなかった」

「それでね、京都観光貸切りタクシーで検索しても MK タクシーと旅行会社しか出ないから私が作るホームページはたぶん MK の下に掲載されると思うは、そうなると爺ちゃんのホームページにアクセスと観光貸切りの予約が集中しても爺ちゃん一人では話にならないから、爺ちゃんの友達を数人誘って見たら?」

「おう、それは簡単だが、個人タクシーの支部はバラバラになるが...」

「それはいいの、でも、MK に取られた客を取り返すという気概と MK よりサービス満点出来る紳士的な運転手さんを探してよ!、ホームページには「サービス満点京都観光個人タクシーグループ」を宣伝コピーにするつもりですから!分かった、爺ちゃん」

「はい、さくら社長、分かっています」

「それと明日からはネクタイとスーツで運転して、それにタクシー車内では絶対に禁煙して、それに道路には絶対に吸い殻のポイ捨てはしない。それと明日の日曜日に洋服の青山でスーツとワイシャツ、ネクタイと靴を買いに行きます」

「はい、さくら社長...!」

こうしてさくらと爺ちゃんとの楽しい夕食はお開きとなり爺ちゃんは先に風呂に入っていた。

爺ちゃんが湯につかり体を洗うタイミングでさくらが真っ裸で前も隠さず入って来た。さくらはシャワーを浴びてから湯船に浸かるが、これは家庭の風呂では爺ちゃんと二人は入れないためにさくらが小学校6年ごろからこの時間差になったが、どちらかが先に入るかは臨機応変になっていた。その小学6年ごろ生理が始まり爺ちゃんの姉二人から「さくらはもう大人だから爺ちゃんと風呂に入るのをやめなさい」と禁止されていたが、中学生になっても爺ちゃんと風呂に入るのが楽しみだった。

さくらは背が高くパソコン部の他にも陸上部で走っているので贅肉はないが、もう完全な女性になっていた。爺ちゃんも当初は目のやり場に困って姉二人に相談をしていたが、これが不思議なもので毎日二人で入っているうちに自然になにも感じなくなり爺ちゃんの目にはさくらのすべてが入っているはずだが見ているようで見ていない。非科

学的な現象だが、これは人間以外の動物はパンツを履いていないが、動物同士は気にならないのと同じかと爺ちゃんは思っていた。これはさくらも同じで爺ちゃんの裸を気にもしていなかった。

爺ちゃんは交代で湯船に入っているとさくらが、  
「観光クラブの運転手さんが5名ほど集まったら去年(1998年)から始まったNPO法人というのがあって、私は個人タクシー救済ボランティアのNPO法人を設立して爺ちゃんを代表にしますからネ。もう爺ちゃんも5年後には個人タクシーの定年でしょう、私は高校を卒業して看護学校に入るけどお金もいるし、NPO法人は定年もないし代表として給料も貰えますから爺ちゃん、授業料は安心して」

爺ちゃんは13歳のさくらが、パソコンでホームページが作ることにビックリしたが、それ以上にわしの定年後から看護学校の授業料までの計画をしていることにビックリするより涙が溢れてきた。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 11 話 MK タクシー値下げの陰 4 サービス満点・京都観光個人タクシー倶楽部発足

小説老人と性 里坊さくら苑 11 話 MK タクシー値下げの陰 4 サービス満点・京都観光個人タクシー倶楽部発足

里井は昨日孫娘のさくらと洋服の青山で買ったばかりのスーツとワイシャツとネクタイ、それにピカピカの靴で京都駅の八条口で客待ちをしていた。そして簡易の灰皿を手に持ちタバコを吸っていると顔なじみの個人タクシーの運転手が数名集まってきた。その運転手から、

「里井さん～えらいパリッとして観光の客の予約が入っているの?」

「いやいや、これから MK に勝とうと思ったらまずカッコウから入れと孫のさくらから説教されて...アハハ」

「そらま～MK の制服はなにせ森英恵のデザインでデザイン料が 200 万やからね～そんな人には里井さん、勝てへんで...」

「まあね～しかし、個人タクシーが MK より、サービスが満点なら MK とはいいい勝負が出来る。そもそも、あの MK の青木会長は京都の個人タクシーの接客サービスを見習い追越せば必ず京都市民に愛されて MK の天下になると予言をしていたが、そうなった。だから我々個人タクシーの有志が反対に MK の接客サービスを見習い追越せば必ず全国の観光客に愛されて我々の個人タクシーグループの天下になると孫のさくらが予言したが、わしは孫を信じている」

この里井の大演説はこの京都駅八条口や北口でも連日行われたが、里井の考えに賛同するものは極少数で反論する運転手が里井を見つけては反対のための論争を仕掛けてきた。その反論のほとんどが、

「MK は運賃が 10% 安いから市民に支持されているだけだ」になるが、この反論には、

「もし、貴方の大事な人が夜中に病気になったが、救急車を呼ぶほどでもないで近くのワンメーターぐらいの病院に行くためにタクシーを呼ぶが、どこのタクシーを呼ぶ?」

この質問には全員がまず法人タクシーは呼ばない。次に知り合いの個人タクシーを呼ぶだが、もし、貴方が一般の市民なら?」

「そら～MK を呼ぶ...MK しかないだろう」

「それは運賃が 10% 安いから?」

「.....」

「私が個人タクシーの免許取得したころは夜中の急病や大事な家族の輸送には個人タクシーが一番安心だったが、その信用を取り戻すことが、すなわち MK に取られた客を取り返すことになる」

里井のランチタイムは百万遍の京都大学近くのランチ喫茶「らんらん」の日替わり定食でもうかれこれ 20 数年は通っている。この店には里井と同じ個人タクシーのベテランなど 15 名ほどが客となり色々な情報を共有していた。ここの運転手は観光を得意としている運転手ばかりで最近流行りだした携帯電話をどのタクシー運転手より早く導入していた。その携帯電話に関東方面の観光客からいつ電話があっても京都駅に迎えに行けるように身なりは今日の里井と同じようにパリッとしていたが、普段の里井はさくらが指摘するだらしない方だった。

その里井が、MK 打倒にはまず服装から入らなければならないと駅などのタクシー乗り場で力説している噂は個人タクシー仲間では有名になっていた。ただこのランチ喫茶のメンバーは MK 打倒などにはまったく興味はなく里井がいう京都観光客を増やす作戦にホームページを活用する大作戦には賛同している。

この店のママの一人娘の静香は京都大学法学部の二年生でランチ時には百万遍の信号一つ渡った大学から店の手伝いに毎日来ている。その静香はノートパソコンを持っているので里井は静香にここの個人タクシーの仲間に MK タクシーのホームページを見せてやってくれと頼んでいた。里井もそうだが、携帯電話は持っているが、まだメールさえ出来ない連中ばかりでこの静香に皆んな教わっていた。

里井はこの静香が産まれた時にはこの店の常連客で母親の愛子は静香を生んですぐに離婚していた。愛子は母親の店のママになり、静香は愛子の両親に育てられてきた。里井はこれらの母娘の境遇を見てきたが、まさか自分の娘が離婚して孫を自分が育てるとは当時は思っていなかった。その静香は愛子ママ似の色白美人で京大の学生や個人タクシーのおじさんのアイドル的存在だが、なぜか里井と気が合うのか里井が考えている MK タクシー打倒大作戦と一緒に考えてくれるという。そして静香とさくらが「サービス満点・京都観光個人タクシー倶楽部」のホームページを製作することになった。

さくらが企画した「サービス満点・京都観光個人タクシー倶楽部」はとりあえず里井タクシー、駒井タクシー、新垣タクシー、山本タクシー、大塚タクシーの 5 個人タクシーで発足されて里井和博が理事長となり、4 名が理事となった。静香は MK タクシーのホームページを参考にこの 5 名にテキパキ指示を出していた。まず 5 名の顔写真と各自のタ

タクシーとともに撮った写真2枚だがこれは必ず携帯電話のカメラで撮って静香のパソコンに送ることだが、これとて静香に手取り足取り教えてもらわなくてはならない。

次に各運転手のプロフィールと自己紹介だが、この書き方も静香にひな型を作って貰って書くだけだがかなり苦勞していた。そして各運転手のお薦め観光スポットを3箇所書けという静香の命令だが、各運転手は京都観光のベテランばかりだが、それは口だけで各自のお薦めスポットを自慢げに静香に話をしているが、静香は、「はい、里井さんの推薦する「鈴虫寺」は私も一度は行きたくなりましたので、今、私に説明したことをそのまま書いて下さい」とかなり冷たくあしらっていた。それは静香もMKタクシーの値下げで京都のタクシー運転手の悲惨な状況を知り尽くしていたからで、このメンバーが必ずいずれMKに取られた客を取り返すと信じていたからこそMKの運転手に負けないあらゆることを学んでほしいという希望があったからだ。

この口だけ達者な個人タクシー運転手だが、これが里井の指示命令ならとくに、「個人タクシーは一国一城の主で誰にもわしに命令はできない、なんで今頃、こんな書き方を勉強しなあかんのや〜アほらしい〜辞めます」になるが、この母子家庭の静香の成長を個人タクシーの運転手が見守り、高校入試の心配や京都大学の試験に合格の喜びを我が孫のように思っていた静香が今度は個人タクシーのために働いてくれることに感謝をしても裏切ることはできないからこの5名はランチ時には必ず集まり接客サービスや京都観光の勉強をしていた。

こうして各5名のプロフィールに自己紹介、お薦めの観光スポットの原稿や関連写真は静香に集められてその資料はさくらのパソコンに送られてさくらかホームページに掲載していた。まだこの時期はパソコンはそんなに普及はしていなくてホームページへの誘導はアナログ的なビラ、チラシが有効だとさくらは考えてチラシを1万枚印刷して会員が乗せた乗客やタクシー乗り場、それに観光地で観光客に配布する作戦をした。これはパソコンよりもすぐに効果があり、たまたま乗せた観光客を駅から近いホテルまで輸送する途中でチラシを見せて乗客に、「5人で「サービス満点・京都観光個人タクシー倶楽部」を運営しています。その写真の真ん中は私です。裏面には私の携帯番号、プロフィール、料金、それに会のホームページのURLと検索方法もありますからまた宜しく願いたします」

と宣伝していたが、観光案内をしてくれるのが目の前の運転手で言葉使いも丁寧で身なりもパリッとしているので安心したのか、その夜には昼間乗せた客からの明日の京都観光貸切りの予約が少なくあった。

さらにさくらは京都のタクシー運転手が最も嫌う駅から近いホテルの乗客には親切丁

寧に接客して必ずホテルに着いたらドアサービスする、もしドアボーイかいても必ず降りて挨拶することを決めていた。これは最もサービスを重要視するホテルへのアピールのためでここでもボーイに観光倶楽部のチラシを手渡していた。そのタクシーが明るく日の朝にはホテルに泊まった客を玄関で待っている光景はホテルの上層部までも驚かせていた。

まだホームページは表紙だけで「工事中」とあり、秋の観光タクシー予約は9月20日からと記載で完成はしていなかったが、全国紙の小林記者から13歳のさくらが祖父ら個人タクシー運転手の悲惨な状況をなんとかしようとホームページと京都観光個人タクシー倶楽部、それにNPO法人の立ち上げる課程とそれに協力している京都大学法学部二年生の静香に取材依頼があった。さくらは夏休みで毎日のように観光客接客サービスと京都観光、それに一般常識の勉強会をしている百万遍のランチ喫茶「らんらん」で静香と観光倶楽部理事5名ともに取材を受けることになった。

記者は小林記者と女性記者の吉川春江、それにカメラマンで取材は6時間にもなりその時の記事は明後日の8月25日の朝刊の全国版と決まっていた。その25日の朝にはその全国紙を購読している会員は新聞配達員より早く家の前で新聞を待ち、さくらと爺ちゃんは3時には新聞配達店の前で新聞を乗せたトラックの到着を待っていた。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 12 話 MK タクシー値下げの陰 5 人間は嫉妬と妬みでできている

小説老人と性 里坊さくら苑 12 話 MK タクシー値下げの陰 5 人間は嫉妬と妬みでできている

さくらと爺ちゃんは全国紙の毎朝新聞を 2 部買って新聞配達所の前で爺ちゃんのタクシーの中で読んでいた。大きな見出しには「13 歳の少女と京大女子学生が個人タクシー救う」。小見出し 2 つには「MK タクシー値下げの陰」と「祖父に育てられた中一少女、パソコンで恩返し」の記事で写真は「個人タクシー 5 台と運転手 5 名勢揃い」と「接客サービスと京都観光」勉強会の様子、さらに「さくらと静香」の写真などで紙面の約半分を使う特大記事になっていた。

この中の記事では小林記者が一ヶ月かけて取材してきた「MK タクシー値下げの陰」があるが、この MK の値下げと接客サービスで MK は京都市民からの圧倒的な支持を受けたが、個人タクシーを含む京都のタクシー運転手の水揚げと収入は約半分以下になった。これに対して京都個人タクシー連合協同組合、京都タクシー協会、タクシーの労働組合の全自労京都府本部はなんら適切な対策を出せない現実だと聞いた 13 歳の少女が個人タクシー運転手の祖父にアドバイスした言葉が「サービス満点のタクシーなら誰でも乗ってくれるよ」になるが、この孫の一言が「サービス満点・京都観光個人タクシー倶楽部」の発足の動機となったとこの会の理事長の里井和博 (70 歳) さんは笑っていた。

五団体の談話では、京都陸運支局乗用自動車課は「タクシーの乗客から陸運支局に年間 1000 回の苦情が寄せられているが、やはり個人タクシーが京都のタクシーの台数からすると多過ぎる」、京都タクシー協会会長は「50 数社中で一社だけの値下げは不当」、京都個人タクシー協会会長は「個人タクシーのサービスは MK には負けていない」、全自労組の府本部委員長は「京都のタクシー労働者に最低賃金以下、残業代未払いの運転手はいない、仮にいてもそれは運転手の自己責任になる」、MK タクシー青木会長は「13 歳の少女がサービス満点のタクシーにはお客様が乗るという新鮮な提案をもう一度 MK 社員に徹底したい」、という記事になっていた。

さくらと爺ちゃんが朝食が終わったのが6時だが、そのころから爺ちゃんの携帯電話は鳴り止まなかった。そのほとんどが、個人タクシーの運転手や法人タクシーの運転手で「新聞読んだ」だった。その中でも京都駅の北口で客待ちをしている運転手からは、「今朝の新聞の話題で持ち切りだが、ある個人タクシー協組の幹部や法人タクシーの労組の幹部はかなり記事に批判的で里井さんに抗議すると息巻いている」

という電話は八条口で客待ちしている運転手からもあり、里井は観光倶楽部の4人にも電話をしたが、その4人にも同様の電話があったが、一方ではこの観光倶楽部に入りたいという個人タクシー運転手が多数いることも分かった。

また里井が毎日ランチをしている「喫茶らんらん」の愛子ママからも電話があり、今店ではモーニングをしている運転手さんが8名ほどいるが、皆さん、新聞を読んで話題になっているという、里井は、

「ママありがとう、それで反響は？」

「あのね～里井さん、私も長いことを客商売をしていて分かったのだけど、人間というものは悲しいもので同じ運転手さんが、こうして新聞やテレビに出ると嫉妬と妬みが頭の中で渦巻き信じていた人でも屁理屈で批判するものです。それはやっていることが正しい証拠ですから気にしないで里井さんは前へ前へ進んで下さい。それに同じ電話を観光倶楽部の4名の運転手さんにしましたが、皆さん、動揺していないから安心して下さい」

「ママ、かたじけない」

「そんなん、いいのよ。そそ、静香がさくらちゃんに代わってと言っています」

さくらが電話に出ると、静香は、  
「さくらちゃん、パソコンのアクセスカウンターが昨夜見たら198だったが、それが今では4789になっているよ!すごい反響ネ!。それにお問い合わせのメールには未読のメールが105通も溜まっています。この中にはたぶんテレビや新聞の取材依頼があると思うけどどうする？」

「それね～毎朝新聞の小林記者さんが、系列のテレビ局から取材があるからと言っていたが、他のはどうするのか私には...?」

「分かった、私の方から小林さんに電話します。それまではマスコミからのメールには返事しないで」

「分かったは、それにしても爺ちゃんの電話も朝から大変なことになっているよ」

「そう、私にも中学、高校時代の友達からや各恩師からも電話やメールで大変なことになっているの～アハハ」

そしてさくらがパソコンのカウンターを見ると「10056」となり、未読メールは221通にもなっていた。

里井も観光倶楽部の会員もこの日は電話対応に追われてタクシーの営業をやめて喫茶「らんらん」に集まっていた。この日のランチ時には新聞を見たタクシー運転手や静香の

京大の男子ファンが店に集まりたった5席のテーブル席はオール合席でゴった返していた。この日集まった運転手はすべて観光倶楽部への入会の希望だったが、里井ら理事は入会の即答を避けてあるシティホテルの喫茶室に移動していた。

このホテルの喫茶室は広々として個人タクシーは駐車場が無料で時間の制約もないので打ち合わせや理事会によく利用していた。6席テーブルを予約していたのでボーイは席に案内するなり、  
「当ホテルの営業部の長尾部長が、「サービス満点・京都観光個人タクシー倶楽部」の皆さまへご挨拶したいと願っていますが?よろしいでしょうか?」

このホテルは京都駅から近いワンメーターの距離で新幹線八条口からホテルへの客をよく乗せるが、運転手からすれば1時間客待ちしてワンメーターでは時給300円にもならないとホテルへの客に八つ当たりしていた。当然ながらホテルの客は気分を害してホテルのフロントに抗議するのならまだしも次回からそのホテルを利用しないという事例が山ほどあった。

それらを踏まえた上で長尾営業部長は、  
「いつも「満点タクシー」の皆さまが当ホテルのお客様を八条口から送って頂きありがとうございます。お客様からは皆さまの接客サービスにお褒めの言葉を頂き、是非、あの親切な個人タクシーで京都観光をしたいという申し入れが多数あります。しかし、皆さまもご存知の通り、ホテルがお客様へ斡旋するタクシー貸切りや料亭へのお客様へのご手配には約10%~20%のリベートが発生しますが、このリベートは各ホテルの重要な収入源になっています。今朝の新聞の記事では「満点タクシー」さまはNPO法人だと書いてありましたが、この点ではどういう扱いになるのかとお伺いしたく失礼ながら本日もこうして貴重な時間を頂いています。あっ、それと本日の喫茶室の料金はホテルが負担しますからなんでもご注文して下さい」

この長尾部長の話に里井は恐縮しながら、  
「いや~実は私の孫にどんな近いお客様にもサービス満点にすれば必ず次回も乗っていただけると教育されたものです。そのNPO法人というのも私らこの5人もまったく把握していません。ですからホテル側から満点タクシーへの斡旋リベートはどうするという提案をいただけたらまたこの5名の理事で考えます」  
「あっ、新聞に掲載されていた「さくらさん」さんは里井理事長のお孫さんでしたか、それはそれは、それならこちらでも弁護士に相談して提案させていただきます」  
「こちらでも京大法学部学生の静香という会の顧問がいますから、できたら静香と直接話をしていただけたら私達も助かります」

長尾部長の挨拶の後、理事 5 名が本日の議題の会への新規入会について話し合っていた。里井は、

「これだけ話題になれば秋の観光シーズンの予約はこのメンバーだけでは足りないのは目に見えている。とはいっても誰でも簡単に入会させればお客様に「サービス満点」が保証されない...」

大塚理事は、  
「そやねん、さっき「らんらん」に来ていた運転手とは皆んな仲がいいが、売上げのためなら違法な場所の客待ちや京都駅でポン引きもしている。そんな奴らを入会させたら会の恥になる」

駒井理事は、  
「しかし、誰を入会させても、誰を断ってもいずれも我々に対しては嫉妬と妬みで暫くは茨の道になると「らんらん」のママが電話でいていたが、この人選は難しい」

新垣理事は、  
「とりあえずは追加の会員の数を決めよう!」

ということで理事一人が 2 名を推薦して 10 名、総計 15 名、顧問はさくらと静香で結成されることになった。さらにこの会の通称名をホテルの長尾営業部長が、いみじくも発してくれた「満点タクシー」に決定していた。

こうして各理事はそれぞれ 2 名の推薦運転手を決めて「満点タクシー」のホームページに掲載するプロフィールや自己紹介の原稿、それに各会員お薦めの観光コース 3 箇所を紹介する原稿やそれに該当する写真の撮影などを指導命令する立場になっていた。各理事はこれらを静香に指導命令されて苦勞して一時は脱落しかけた自分の経験も語りながら新会員に教えていたが、ある理事はしみじみ、  
「今までは MK の新聞記事を見る度にその嫉妬や妬みからか?、朝から晩まで MK タクシーの悪口を語っていれば事足りたが、その私が満点タクシーの理事になり新会員の運転手に接客サービスの指導とは...穴があったら入りたい心境だ!。だが、こうしてお客様に愛されるタクシーを作ることの苦勞を知った。こうなれば MK に勝つまではやめない!」

## 小説老人と性 里坊さくら苑 13 話 NPO 法人京都観光障害者 車椅子高齢者誘致及びバリアフリー化促進事業認可

小説老人と性 里坊さくら苑 13 話 NPO 法人京都観光障害者車椅子高齢者誘致及びバリアフリー化促進事業認可

さくらの夏休みも後 5 日になり新聞やテレビの満点タクシーの取材はこの間にすべて終えていた。このニュースを見た全国の小学校や中学校に続々パソコン部が開設されてその数も増えてこの分野の取材がさくらの朱雀中学にも取材依頼が数社ありまだまだマスコミにホットな話題を提供していた。

一方、京大法学部の静香は同じ法学部の仲間とともに満点タクシーの法人化の研究をしていたが、果たして満点タクシーが非営利事業かという問題に突き当たっていた。ただ、この NPO 法人の法制化は昨年 (1998 年) の 12 月から始まったばかりでこの NPO 法人を受け付ける京都市 (政令都市は市) の役人も大学の教授もそんなにこの法律を把握はしていなかった。そこでこの問題を静香はさくらに相談していた。

さくらは連日ホームページのお問い合わせ欄に寄せられる激励や京都観光の相談などに返事を書くために毎日夜遅くまでパソコンの前に座っていた。その中で多かったのが車椅子での京都観光は出来るかという問い合わせや高齢者の夫婦二人での観光は出来るか? それに障害者でも観光が出来るかだった。これを爺ちゃんに相談したが、京都の有名観光スポットのほとんどが東山の中腹にあり、それに数十段の石段が境内アチコチにあるのが普通で車椅子や高齢者には勧めたくはないという。

さくらは、  
「爺ちゃん、それならお寺の高齢者のお防さんも数十段の階段を歩いているの?」  
「いやいや、お寺は貴重な文化財でお寺には必ず消防車が通れる道がある。寺の坊主や職員はその道を自動車を通り本堂や寺務所に通っている」  
「それなら爺ちゃん~その防火道を使って車椅子や障害者、それに高齢者をタクシーに乗せれば誰でも簡単に観光ができるのではないの?」

「そうか～しかし、本堂や伽藍の拝観にはやはり階段があるが...?」

「それなら本堂や伽藍に上られるスロープを付ければ誰でもご本尊を拝めるよ～爺ちゃん」

「そうか～しかし、車椅子や障害者のトイレはどないするのや～さくら」

「そんな簡単で車椅子障害者用のトイレがあれば解決します」

「そうか～しかし、あのガメツイお寺がそんな金をだす?と思う～さくら」

「だから、満点タクシーのメンバーがお寺に交渉すればいいのよ!、爺ちゃんは理事長よ、ガンバレ!」

というさくらと爺ちゃんの会話を静香に紹介していたが、飲み込みの早い静香は、  
「そうか～つまり、車椅子や障害者、それに高齢者を京都観光に誘致する事業、さらに京都の観光スポットのバリアフリー化促進事業の NPO 法人の設立になるのネ...さくら!」  
「そう、車椅子にも障害者にも高齢者にも誰にもサービス満点の接客をするのが、満点タクシーになります」  
「OK、OK.、さくらこれでいこう～。それにしてもさくらは京大の法学部の教授より頭がいいよネ～アハハ」

さくらは MK タクシーに勝とうと思えば敵を知ることが大事と夏休み中に青木会長の自叙伝 2 冊をネットで見つけて買っていた。その 2 冊を読んだ感想はそんなに感動するエピソードはなく色々生い立ちや陸運局とのバトルの苦労は書いてはあるが、青木会長の商法は新聞やテレビで報道されている「タクシー業界の風雲児」とか「MK 天才商法」「青木マジック」とかはマスコミが作ったもので斬新な情報や青木会長から学ぶ物は何一つないと思った。

つまり、MK 青木商法とは近江商人の「三方良し」、ダイエー商法の「いいものを安く」で日本の商法の古典になる。これは現在あらゆる企業から街のラーメン屋さんまで実践している当たり前の消費者へのサービスでありなんら参考には当たらないことになるが、これが分からない企業はこの日本には一つもない。あるとするとそれは京都の MK タクシーを除くタクシー業界になる。

この京都では「接客サービスが悪いタクシーの運賃は高く」で「接客サービスが良いタクシーの運賃は安い」という珍逆転現象が起っている。それでは京都市民にも観光客も愛されるはずはなく市民も観光客も MK タクシーを血眼になって探しているのが現状でこれは MK の青木会長側からすれば他のタクシー側戦略ミスの敵失でありなんら自慢することもなくこんな自叙伝を読む価値もないと中学一年生のさくらの初めての厳しい書評だった。

さくらはその日の夕食の時にさくらが読んだ青木会長の自叙伝の感想を爺ちゃんに話しをしていた。

「そうか～さくらの目には青木会長がラーメン屋の店主程度にしか見えないのか?、わしら 90% の運転手は青木会長を巨悪の偉大な人物として見てきたが...?」

「まあね～それは少し言い過ぎだけど...地域にラーメン屋が乱立してどの店も売上げが減少したのをなんとかしたいとあるラーメン屋の店主がラーメンの値段を 10% 下げてサービスを改善したところ売上げが上がり儲けたという話と同じと私は思っただけよ!」

「そうか～なら、他のラーメン屋も 10% 値下げしてサービスの改善をすればいいが、その他のラーメン屋は値段も下げずサービスの改善もしないでそのラーメン屋の悪口を言い続けているのが、我ら京都のタクシー業界だとさくらはいいたいのか?」

「まあね～それもあるけど～私が爺ちゃんや満点タクシーの会員にいいたいのはもうそんな京都のタクシー業界の顔色を見ないで理想の京都のタクシー業界とはこれだという思想を持ってほしいの、その思想が合えば MK タクシーとも共闘する柔軟性がほしいの」

「思想や志は大事だが～しかし、さくらの最後の MK との共闘はまだ少し早いから会員には伏せておく」

「それは爺ちゃんの好きにして」

静香はさくらからの提案の京都観光スポットバリアフリー化促進という提案があったが、このバリアフリーという言葉はまだ家の中の段差を解消する建築用語の一つでしか使われていない。それが今から 10 年年ほど前 (1984～1988 年) に道路や駅に点字タイルブロックの設置が義務付けられてから視覚障害者や高齢者の安全を守るという言葉になっていたが、まだまだ一般的には認知はされてはいなかった。

静香と同じ京大法学部の仲間とともにもう何回も訪問している京都市の市民活動総合センターに新しく書いた NPO 法人設立申請書を持って課長に面会を申し入れていた。この課長は 50 歳過ぎの男性でスケベたらしい顔には全員嫌悪感を感じていたが、そこは女の知恵で 5 人ともミニスカートを履いて胸元が大きく開いた服装でこの課長に京都観光障害者車椅子高齢者の誘致及び観光スポットのバリアフリー化促進の意義を熱く全員で語りながらも課長の視線を胸に感じながら説明していたが、課長そのものはまだバリアフリーとは駅のプラットフォームの点字ぐらいしか知識がなく静香らに反論は出来なく申請書類の受理までこぎつけていた。その認可の返事は 2 ヶ月～4 ヶ月以内かかるとは言ったが、静香は課長の目の前に豊満な胸がわざと見えるように、

「課長さん～お願い～一ヶ月ぐらいで認可をお願いします～」

課長はその静香の迫力に負けて首をコクリと下げたように見えた瞬間に女子大生 5 人組は思わず「キャ～」と黄色い歓声を挙げていた。

さくらは静香から FAX で送られてきた京都市に提出した NPO 法人申請書類をさらに毎朝新聞大阪本社の小林記者に送っていた。さくらは MK の青木会長の自叙伝からは何も学ぶことはなかったが、MK タクシーが全国的に有名になったのは青木会長が次から次へとタクシー関連のアイデアをマスコミにリリースするというしたたかさは見習う点だと悟っていた。

そもそも京都市のタクシー台数 8500 台、その内 MK タクシーグループは約 900 台、個人タクシーは約 2500 台あるが、爺ちゃんの個人タクシーグループの「満点タクシー」はたった 5 台でスタートした。これは京都のタクシー全体のわずか 0、1% 以下程度のタクシー台数にしかならないが、小林記者が記事にしてくれたお陰でもはやこの知名度は MK タクシーの次に有名になっていた。

その MK タクシーも出し続けてきたマスコミ受けするアイデアも枯れてしまったのか音無しになっていた。このさくらからの FAX を受け取った小林記者は京都支社の記者 3 名に応援を求めて京都の主要観光スポット 60 社寺に今後、車椅子や障害者、高齢者の観光客を受け入れるためのバリアフリー化の計画はあるか?、今後、車椅子障害者用のトイレの設置の計画はあるかのアンケート調査をしていたが、このアンケート調査をしているという記事がまず大きく報道された。

さらに、これは個人タクシー運転手を祖父にもつ里井さくらさん (13 歳) が、祖父が結成した NPO 法人 (申請中) の「満点タクシー」のホームページに車椅子、障害者、高齢者から寄せられた問い合わせが余りにも多いことからそれではこれらの人達が安心して京都観光を楽しめる環境を作るために京大法学部の有志 5 名が NPO 法人の設立の申請をして京都市から一ヶ月程度で認可される見通しだという。

この新聞記事を見た梶本頼兼京都市長の談話では市民憲章に「旅行者を暖かく迎えましょう」とある通り、京都市が管理している「二条城」「平安神宮」「岡崎動物園」などは率先してバリアフリー化、車椅子障害者トイレを設置するとあった。この毎朝新聞の記事や京都市長の談話を受けて京都仏教会もバリアフリー化促進をしなければならなくなっていた。そして静香にあのスケベーたらしい課長から電話があり、一ヶ月を待たずして 9 月 19 日に NPO 法人設立申請を認めるといういい知らせがあった。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 14 話 里井さくらスーパー少女、 企画力爆発、京都観光ガイドブック 3 冊出版

小説老人と性 里坊さくら苑 14 話 里井さくらスーパー少女、企画力爆発、京都観光ガイドブック 3 冊出版

9月20日(1999年)にNPO法人「サービス満点・京都観光個人タクシー倶楽部」(略称・満点タクシー)が正式に発足した。それと同時に満点タクシーのホームページで秋の観光シーズン(10月、11月、12月)の予約を受け付けたが、すぐに一流ホテルと提携している大手旅行会社で約半分は押さえられていた。それから数時間で15台の予約はすべて完了になり、冬の観光(1月2月)の予約は11月1日からのお知らせと予約完了のお礼をホームページに書くのに静香は嬉しさとその反響に驚いていた。

静香は京大法学部の学生で母親の経営する喫茶「らんらん」でランチ時に2時間ほど手伝っていたが、アルバイト料は母からは貰っていない、そこで満点タクシーにアルバイト職員として登録して月々10万円の賃金を貰うことになった。これは会員15名は必ずここでランチをするが、会員は個人のパソコンは持っていないために静香のノートパソコンで〇〇運転手指名の予約を知り、その予約した観光客に該当する運転手が携帯電話で予約客に連絡をして待ち合わせ場所や日時の確認をするが、その運転手への連絡や運転手を指名していない観光客への配車業務にはどうしても会には事務職員がいるからだ。

さらに先月から満点タクシーの宣伝チラシをタクシーの乗客や観光客へ配布していたが、そのチラシの反響が予想よりあったので運転手の携帯電話にも予約がかなりあった。そのありがたい予約電話にもう秋の観光はすべて満タンと断るのも失礼だし、それにもったいないということで「私は予約があります」が、他の会員でも良かったら予約出来ますというために現在の会員が一人ずつ准会員を推薦してその15名の個人タクシー運転手に観光を手伝って貰うことになったが、その運転手への配車業務も必要になったからだ。つまり、喫茶らんらんが仮の会の事務所になり、静香が司令官&マネージャーのために毎日毎日会員30名も集まりテーブル5席、カウンター5席では誰か5名はランチの立ち食いになっていた。しかし、これが観光シーズンにもなると運転手さんすべて観光案内をするためにランチ時には誰一人も店にこないことになればそれは娘の静香の

責任だから母親の愛子は静香の貰う賃金 10 万円の半分の 5 万円は私に権利があると真剣に静香に要求していた。

一方、さくらは企画宣伝職員及びホームページ更新とこのさくらのパソコンはさくらの私物のためにそのリース料としての名目で月々 2 万円支給されていた。そのさくらの企画宣伝力は的を得ていて観光が比較的少ない 1 月、2 月、6 月、7 月の平日には乗客と車椅子を「タクシーに乗せる講習会」や「車椅子観光体験ツアー」「障害児 50 人タクシー観光無料招待」などは京都福祉協議会との共催で開催した。さらに観光スポット 60 箇所の「バリアフリー調査」や会員のすべてが、「介護福祉士二級に挑戦の学習会」そしてインバウンド観光客が増えるのを見越して会員に「英語、中国語、韓国語の学習会」を京都市観光局との共催などを企画してはマスコミにリリースしていた。

さらにさくらは「お年寄りにやさしい京都観光」「車椅子にやさしい京都観光」「修学旅行生にやさしい京都観光」のタイトルの京都観光ガイドブックの企画をしていた。これは会の発足当時に会のホームページに掲載する会員のプロフィールや自己紹介、それに会員が推薦する観光スポット 3 ヶ所の見どころを各自が書くことになったが、なにせ書くことに縁がなかった運転手にとっては苦行でしかなかった。それでもタクシー運転手のアイドル的存在の静香に叱咤激励されながらも文章を書いたのが会のチラシやホームページで紹介された感激から文章を書くことにそんなに抵抗がなくなった頃を見はらかつて会員にお年寄り、車椅子、修学旅行生にやさしい京都観光のテーマで取材と写真撮影をしてもらうといういわば会の宣伝にもなる本の企画だった。

これには正会員も準会員もかなり協力的ですぐに各自の取材合戦が始まりその記事を持ち寄り連日編集会議の中で記事が一定数集まった時点でさくらは数社の出版社に企画書をメールで送ったが、ある出版社から出版するという連絡がありその 3 ヶ月後には「お年寄りにやさしい京都観光」が出版された。これがマスコミに取り上げられたことから大手書店には 2 列の平積みで並べられて京都ガイドブックでは 1 万部売れたら大ヒットだがこの本は 3 万部突破で点字本にもなっていた。本の記事では会員が取材した記事や写真には作者名もあるが本の表紙には「NPO 法人満点タクシー編」とあり、会員一同の協力で本を出版できた喜びを分かち合っていた。続いて「車椅子にやさしい京都観光」「修学旅行生にやさしい京都観光」も同じ流れで大ヒットしていた。そしてその印税の全額はいずれ会の事務所が必要になるので会にプールされ静香が管理していた。

またこの本とは別に会の大塚理事が小説「タクシードライバー・ジョッキの竜」(ユニプラン)を出版していた。この大塚は当初は自分のプロフィールも自己紹介ばかりかホームページに掲載する推薦観光スポット 3 ヶ所の紹介説明文を書くの苦労していたが、そ

の静香に叱咤激励されても書けずに涙を流しながら「この年でこんな屈辱は嫌」だと会を脱退すると3回も里井理事長になだめられて会に残った過去がある。

それが会のホームページに自分の書いた文章が掲載され感動した途端に生まれて初めて客待ちの駅で一冊100円の古本数冊の小説を読んで密かに書き方を勉強していた。そしてある日突然「そうだ～作家になろう」と決心してその宣言を喫茶「らんらん」でタクシー仲間に披露していたが、全員冷笑していた。それから一ヶ月後には原稿用紙250枚の小説を静香に読んでほしいと持ってきた。静香はその小説を読んだが書き方は雑で「箸にも棒にもかからなかった」が、タクシードライバーが悪者をやっけるという必殺仕掛け人風の小説は面白くて同じ京大の友人がアルバイトをしている出版社に持ち込んで貰った。そして運良くその小説が編集者に認められて作家デビューしていた。これも当然多くの新聞社が「65歳個人タクシードライバー・作家デビュー」の見出しで記事にしてくれた。その後、東映シネマから映画化のノミネートされる。また、産経新聞系の「大阪新聞」から週一回の連載コラムの執筆依頼がありこれも原稿締切日に追われながらも静香に指導され泣きながら書いていた。

これらのさくらが企画した催しはこれもマスコミが丁度ホットなニュースのない時期で各社一斉に記事にしてくれた。しかも、マスコミへのリリースは満点タクシーからだけではなく各公的機関からもあり記事の信憑性と信頼性は揺るがなくNHKも大きく取り上げてくれた。このさくらの企画力はどこからきているかの質問が満点タクシーを最初に世に出してくれた毎朝新聞の小林記者から取材されたさくらは、「これね～MKタクシーの青木会長の自叙伝からヒントを得て青木会長を見習ったの、あの本にはなんの感動もなかったが、青木会長はタクシーにまつわるアイデアを次から次へとリリースしてマスコミのお陰でMKタクシーは成功したが、そして「タクシー運賃値下げの件」では運輸省や陸運局など公的機関と戦ったことが市民に好感を持たれた。しかし、公的機関を敵にしたのでMKタクシーは社会的には「タクシー業界の風雲児」ともはやされてはいたがそれは決して褒め言葉ではないと私は理解したの、だから私は満点タクシーを社会的にも一流のタクシーにするためには公的機関とともにタクシー業界やタクシー運転手さんを育てて一流の職業にしたいと思ったのであんなだらしない私の爺ちゃんを筆頭に過酷と思われる企画を運転手さんに連発したのです。それが小林さんの大きな記事になったので皆さん引くに引けなくなって私の爺ちゃんは古希になっていたが同じような年齢の皆さんとともに成長したのですが、ある意味満点タクシーとは人間的にも満点になってほしいという意味だったのです。

(ちなみにこの小説を書いている私も70代で「古希からの青春」を楽しんでいます)

## なぜ光秀は信長を殺したのか?天王山の合戦は光秀信長の人妻お種争奪戦 京都歴史裏の小説 11 話

なぜ光秀は信長を殺したのか? 天王山の合戦は光秀信長の人妻お種争奪戦京都歴史裏の小説 11 話

織田信長は男色家といわれているが、女子も好むという両刀使いだった。信長が京の宿としていたのは本能寺で蛸薬師油小路東北角にあったが、これは寺というより城造りで堀も物見櫓もあった。寺の西側の通りは油小路という名前の通りに油問屋が10数軒あるが、その本能寺西側の反対西北角には「油問屋・山崎屋」がある。その山崎屋徳平の妻にお種という新妻がいた、そのお種に恋をしていたのが明智光秀でそのお種を本能寺の光秀の部屋に呼んでは密会を重ねていた。

それを知っていた亭主の徳平は山崎屋の婿養子でしかも天下人の信長の最高幹部でもある明智光秀には逆らえなかった。ところが信長も人妻に目がなかった人物で、しかも豪商油問屋山崎屋の徳平の妻で光秀の女となると余計に抱きたくなるのが信長の嫌な性格。そこで邪魔な光秀を中国征伐への兵を出せと命令していた。その夜、光秀とお種は、「光秀さま～わたしはもう光秀さまのいない都には住めません...」  
「そうか～どうせ信長はお種を手に入れるために何でもしてくる」  
「光秀さま～怖い～」  
「それなら、お種の実家の山崎に身を隠せ、必ずわしが迎えに行く...」

そして光秀が出陣したその日の夜に信長とお種はできていた。そして、お種は、「信長さま～お種は前から信長さまを慕っておりました～」  
と、お種は時の権力者との二股をかけていたのだが、この時代では女性が出世して権力を得るための手段としてはそんなに珍しくはなく極々自然な姿で光秀より天下人の信長の寵愛の日を待ち望んでいた。こんなことを知った上で信長を秀吉の中国征伐の援軍という名目で都から遠ざけたのは光秀も当然ながら知った上で主君の信長に自分の愛妾を快く譲る大人の武士であったなら歴史は大きく変わっていた。

信長から命令され備中松山城に向かう途中の光秀の亀山城でこの2人の関係をスパイからの密書で知った光秀は「おのれ信長～敵は本能寺にあり～」と歴史通りの展開になっ

た。京の都から丹波へは京の西の桂大橋を渡り山陰街道から老坂峠を越えて丹波に入る道しかない。光秀1万3千の軍もこの山陰街道から峠を越えて篠村の篠八幡宮の前を通り亀山城に入った。この光秀の行軍には信長の見届け人の武士が5名同行して光秀が亀山城に入城したことを見届けてから関所に戻っていた。

この山陰街道には桂大橋と老坂に関所があり、それぞれの関所には馬が2頭置かれて丹波方面から軍勢が都に向かえば直ちに信長に報告出来る仕組みがあり、光秀について来た武士の5人は老坂関所の武士でこの先の光秀の監視は園部村や観音峠の関所の管轄であると亀山城の光秀への監視はしなかった。その夜の9時には光秀軍1万3千は勢揃いして篠八幡宮で必勝祈願をしていたが、光秀は武将300名を集めて「敵は本能寺にあり～」と打ち明けたが、これは武将たちの間では噂になっていたからそんなに驚きはなかった。

光秀の馬を先頭に軍は篠八幡宮から西へ大井川に掛かる真新しい橋を光秀は馬に乗ったまま渡るが、この橋は愛宕神社への丹波側からの参詣道の橋で流れが急で川幅がある大井川では大きな丸太を2本縄で固定してあるだけで少しの雨でも流される流れ橋になっていた。それが馬で渡れるように丸太の上に板が張ってあり馬が脚を踏み外さないようにと欄干まであった。

ということは光秀が信長から中国攻めの軍を出せと命令された時と同時に光秀はこの愛宕神社参詣道の橋と道を整備せよと亀山城の家臣に命令していたことになるので主君の信長を殺すことを考えていたことになる。そういえば光秀はこの度の中国攻めの必勝祈願の名目で愛宕神社へ参拝したが、これは本能寺から嵯峨の愛宕山登山口鳥居本までの一条通りの道の偵察と考えられる。やはり光秀軍は大井川を渡り愛宕山の裾を半周して鳥居本から一条通りで都に入り本能寺に攻め入っていた。

本能寺を取り囲んだ光秀軍は1万3千で約1000本の火の付いた弓矢を一斉に放ったことで本能寺のアチコチから火の手が上がるが、信長の家臣200名はまさか光秀の謀反だとは知らないまま寝間着で太刀も持たずに屋敷から飛び出して来たところを足軽でも簡単に槍で刺されて殺されていた。その襲撃の時間はわずか半刻ほどだったが、屋敷が燃え落ちて灰が冷えるまでは半日ほどかかり光秀は信長や森蘭丸などの重臣の遺体を捜したが、なぜか信長とお種の遺体だけは見つからなかった。

ただ、本堂の油小路に近い裏庭の古井戸を調べたらその井戸には水がなく井戸の底から西への抜け穴がありその抜け穴の先には油問屋の山崎屋京都屋敷があった。つまり、

信長に取られたお種の家になる。しかし、光秀はお種とは相思相愛の仲だと信じてはいたが、お種からはこの秘密の抜け道は聞いてはいないし光秀も信長からはこの抜け道の存在さえも聞いてはいなかった。

そこで山崎屋の徳兵衛を捕まえて尋問すればこの抜け道は本能寺を信長が本陣にする前に信長から命令されて掘ったものだと白状していた。つまり、このこと一つとっても光秀は信長に信用されていなかったことが分かる。信長は当初は火事だと思っていたが、光秀の謀反だと知ったことからこの抜け道からお種とともにお種の実家の山崎に逃亡したことは容易に想像が出来た。この戦いに圧勝して天下人になった光秀はまずは坂本城に凱旋してから信長とお種を捜すことにしていた。

このお種と信長が逃げた天王山の麓の山崎の地というのは、西国からも北陸からも油が淀川の山崎港に集まる大油市があったのです。当時の油は照明用に使う菜種油が主で全国からの油商人が集まる山崎村といっても土地は沼地ばかりで農地はほとんどなく摂津と京の都の中間地で旅人のオアシス的存在で平安時代には女郎屋目当てに菅原道真や安倍晴明まで都から遊びに来ていたという記録もあるほど賑わっていた宿場町になる。

信長が隠れていたお種の山崎屋の主人はお種の父親の山崎屋徳太郎で山崎村の村長、村社の離宮八幡宮と宝積寺の氏子檀家の総代で西国街道一の大油商で歴代の天皇から油商元締め鑑札を貰っていた。それ故、政治の力関係には敏感で油商人を通じて全国の戦国武将の動向を探っていた。お種を光秀や信長に近づけたのもこの徳太郎で信長ともかなり懇意にしていた。

坂本城に戻った光秀は秀吉が備中松山城から急遽戻り主君信長の敵討ちを旗印に西国諸国から武将を集め京の都に向かっているという情報から光秀軍は本能寺の変と同じ1万3千の兵を集めて光秀の娘が嫁ぐ勝竜寺城に向かって行軍をしていた。光秀の下には7名の城持ち大名がいるが、この7名がそれぞれ1500から2000人の家来や足輕を組織している。そして各自が本能寺の変や今回の秀吉との戦には大義名分がないと感じていた。しかも陣営内の噂では光秀の愛妾のお種を信長に取られた腹いせ説やそのお種を取り返すため山崎の合戦だという噂が流れて7名の武将の戦意はもうなくなっていた。

そのころお種は秀吉が本陣にしている天王山中腹にある宝積寺に山崎港に水揚げされた新鮮な魚や酒を陣中見舞いとして持って行った。秀吉はこの長い戦いで好きな女っ気がなく欲求不満に陥っていたのでお種の色香に迷いなく負けて一夜を共にしていた。そして秀吉にせめて大阪城に帰るまでは戦場側妻として置いてほしい、そして秀吉さまのお

子を妊んだら認知してほしいと布団の中でお種が甘えると喜んで秀吉は承知したのでそれを書状にした上で信長を隠まっていると打ち明けていた。光秀はその明くる日の早朝に極秘で処刑されて遺体は宝積寺境内天王山登り口の脇に穴を掘って埋葬されたが、そこには木の墓標さえもなかった。

信長が処刑されたその日に秀吉は高台にある宝積寺から陣営を見下ろして総攻撃の命令をしていたが、その秀吉の近くには信長が眠る土饅頭があった。敵の光秀軍の武将の動きは鈍く戦いはわずか半日で勝敗は決まり光秀は夜中に勝竜寺の北門から密かに脱出して小栗村の落ち武者刈りの百姓に竹槍で殺されていた。一方のお種はその後、秀吉の子供を妊み父親の山崎屋徳太郎は秀吉から山崎屋大阪本店の出店の許可と大阪城出入りの許可を貰っていた。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 2002 年タクシーの規制緩和は悪質なタクシー会社を増やすだけ・さくら高校へ

小説老人と性 里坊さくら苑 2002 年タクシーの規制緩和は悪質なタクシー会社を増やすだけ・さくら高校へ

さくらは市立朱雀高校に入学して部活はパソコン部と陸上部でやはり一年生ながらパソコン部ではリーダー的存在になっていた。さくらが企画立案した「満点タクシー」の企画相談役も辞退して無報酬の顧問で会に一応籍を置いていた。一方の静香は京大法学部を卒業して京大大学院に進学して在学中に司法試験を受ける予定だった。この静香も会の法律顧問を辞退して会の無報酬の顧問として籍を置いていた。

さくらの祖父の和博は個人タクシーの定年 2 年前の 73 歳で「NPO 法人満点タクシー」の理事長及び専従役員として会を運営に専念していた。この会も正会員 50 名、准会員 40 名の大所帯になり事務所も国交省京都陸運支局内の自動車会館に移転していた。この自動車会館には京都タクシー協会、京都トラック協会、京都バス協会、タクシートラックの業界紙などの事務所が入り、いわばこの場所は京都府の自動車関係の総本部になっていた。

和博は京都福祉関係や京都観光関連の公共団体の理事にも選ばれて京都の交通運輸社会福祉関係者として活躍していたのでやはり知名度は MK タクシーの青木会長の次に有名で交通福祉関係の新聞記事やテレビのゲストにも度々呼ばれる人気者になっていた。しかしながら京都個人タクシー連合会や京都タクシー協会とはなんら接点がないばかりか、タクシー協会や個人タクシー連合会は里井和博理事長と満点タクシーは MK タクシー同様に京都のタクシー業界の敵だとしてタクシー運転手ともども強烈な批判を展開してきた。

たしかに彼らが指摘するように MK タクシーと満点タクシーには共通点がかかなりあった。それは「タクシーはサービス業だからお客様に愛されるサービスの提供」を旗印にしていることだった。この件では京都陸運支局の堀内支局長と里井はもう何回も話し合っていた。堀内は里井に、

「陸運支局の自動車旅客部には年間約 1000 件のタクシー運転手への苦情が来ているが、これは増えることがあっても減ることはない。これを改善するために国交省は悪質なタクシー会社を排除するためにタクシーの規制緩和を 2002 年 10 月から始めるが、里井理事長の意見を聞きたい」

里井はすでにこのタクシーの規制緩和のことを会の理事や法律顧問の静香、それに孫の企画顧問のさくらとかなり研究していた。政府がいうタクシーの規制緩和とはタクシー事業の認可制から許可制にしてまともな新規のタクシー会社経営者を増やして悪質なタクシー会社をトコロテンのごとく上から優良なタクシー会社を入れて悪質なタクシー会社を下から押し出すという政策だと静香もさくらも理解していた。

里井は堀内支局長に、  
「たしかにトコロテンの箱が一定量しか入らなければ上から押し付ければ下から悪質なタクシー会社は押し出される。しかし、タクシーの台数そのものが規制緩和で増えれば悪質なタクシー会社はなんら損害は無い。むしろタクシーの台数が増えれば増えるほど 1 台当たりの売上げは減少するが、オール歩合、累進歩合、リース制の労働基準法違反の賃金体系では会社はそんなに損をしない。運転手は売上げを上げるためにさらなる長時間労働の過労運転で重大な事故が起きます」

「しかし、里井理事長、今までタクシーの台数が制限されていたから京都のタクシー会社は認可制にあぐらをかいてサービス精神を忘れたという政府が委託している学者の意見になる。この認可制から許可制と規制緩和になれば優良な企業の新規参入がありサービスが悪いタクシー会社が淘汰されるということになると国交省からの通達にも書いてある」

「堀内支局長、その学者とは政府の御用学者の竹内か?、あの学者は大企業本位で中小零細企業の現実は何も知らないで独特の理論に酔っている学者です」

この堀内京都支局長は国交省のエリートで最近仙台陸運支局から赴任してきたが、MK タクシーの自分さえ良ければいいという青木イズムには批判的だが、里井の満点タクシーの今までの運動を高く評価していたからこそ自動車会館への事務所貸し出を応援してくれた人物で里井とも仲が良かった。里井はさらに、

「これは孫のさくらの考えだが、タクシー車両 1 台と運転手 1 名、それに IT 機器を組み合わせるとなんでも出来るし、アイデアは無限に広がり新たな商売が生まれればタクシー運転手の収入も上がり社会的にもレベルがアップする。そういうタクシーの使い方に認可や許可を出す規制緩和こそが必要で誰でも金さえあればタクシー会社を営める規制緩和では暴力団のフロント企業でも新規参入ができる」

「たしかに、現在京都支局に提出されているいわゆる一流企業の JR や佐川急便などの運輸産業、外国資本のホテルチェーンなどのサービス産業からの新規参入を期待していたが、残念ながらない!。提出されているタクシー会社はタクシー運転手専門の消費者金融や元暴力団の組長で前科のある人物、それに運転手を十数人集めたニワカ会社しかない。これではタクシーの台数だけ増えて今までとなんら変わらないが、これは政府の方針で我々はこれに従うしかない」

里井理事長はこの堀内支局長の立場を分かった上で、  
「しかし、タクシー運転手を食い物にしている消費者金融や元暴力団の組長が新規参入の許可申請書を提出しても受理するのか?。しかも、タクシー車両は 10 年オチで走行距離も 100 万キロを越えているが?」  
「それは書類が揃って入れば受理はするしかない、それにポンコツタクシーでもこの陸運支局で車検が通っているので年式や走行距離は問題がないとしなければならないが、一応私の権限で書類が受理されてから概ね 3 ヶ月で許可するが...それを半年ほど遅らして私なりに抵抗しているが...」  
「そうでしたか～」

こうして里井は支局長の堀内と親しく意見交換しているが、3 年前までは個人タクシーの運転手の身分で里井が所属している末端個人タクシー支部の理事にもなれない人間で当初孫のさくらがいつも指摘していただらないタクシー運転手でしかなかった。そのさくらに教育されていなかったら今まで通りに京都駅などの客待ちで個人タクシーや法人タクシーの運転手らとたむろしながら柄の悪い会話で MK タクシーの悪口三昧でタバコの吸い殻をポイポイ捨てながら近距離客には愛想もクソもない接客を恥じだとも知らずに 75 歳の定年まで個人タクシーの運転手を続けていたであろうと思うと孫のさくらに感謝しなかった。

そのさくらはさくらで生まれる前に父親に捨てられ 4 歳で母親にも捨てられて爺ちゃんに今まで育てられたことに感謝しなかった。そのさくらと爺ちゃんはもうさくらが高校一年にもなったのにやはり風呂にはほぼ毎日一緒に入っていた。これは 4 歳の時からの二人の習慣だが、さすがの爺ちゃんもさくらの小学 6 年の時に生理が始まったことを機会にさくらに風呂は一人で入れと言いついてはいたがさくらはこれを拒否して中学を卒業するまでの約束で爺ちゃんはさくらと一緒に風呂に入っていた。

そしてさくらが高校に進学と同時に爺ちゃんはさくらに、  
「お前ももう 16 歳、昔なら嫁にいく年ごろでどこから見ても立派な大人になった...だから爺ちゃん一人で風呂に入らしてくれ...さくら」  
「昔って、それ江戸時代なの?、爺ちゃん、なんで私とお風呂に入るのがそんなに嫌なの!、

私が大きくなってお風呂が狭くなるからなの?」

「いやいや、7歳で男女同席してはならないという法律もある?」

「爺ちゃん、血圧なんぼあるの?それに糖尿病でお医者さんからお酒もタバコも止められているのにそれを無視して毎晩毎晩飲んでパカパカ吸って、血圧180以上もあるのに爺ちゃん一人でお風呂に入って血管が破裂したら死ぬのよ!、私は爺ちゃんに育てられた恩を返せません!」

「さくら、そんなものは返さなくても良い!」

「なら、せめて私が看護学校を卒業してどっかの老人専門病院に就職するまでは爺ちゃんとお風呂に入るのを許して」

「許すとか許さないという問題ではない!」

「そう、そしたらたった今からお酒もタバコも禁止しますよ～爺ちゃん、分かりましたか!」

爺ちゃん、左手に焼酎のお湯割り、右手にタバコの手をピタリと止めて、

「そんな～～～無茶苦茶やん～」

と、こんな会話の後は爺ちゃん、さくらはいつも通り仲良くお風呂に入り、さくらは爺ちゃんの背中を流していた。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 16 話境遇は自分でしか変えられない・里井さくら京都看護大学に入学

小説老人と性 里坊さくら苑 16 話 境遇は自分でしか変えられない・里井さくら京都看護大学に入学

さくらは高校3年になり担任の教師から里井さんの成績だと公立の京都大学でも府立大学に市立大学でも可能で教師は京大の受験を勧めていた。さくらの将来の進路は看護師になるともう4歳で決めていたので教師には京都市立病院付属京都看護大学を受験すると答えていた。そのさくらの4歳の時には母親の尚美が行きつけのカラオケスナックのマスターとの不倫の現場をマスターの妻に見られたという想定外の出来事に陥り頭の中の混乱からこの後始末から逃げ出す事しか考えられずにそんな愛とか恋とかの感情のないマスターと駆け落ちする道を選んだが、結果的にはさくらを捨てることになってしまった。

その母親の失踪を子供心に知った夜、さくらは38度1分の熱を出していた。さくらは爺ちゃんに抱かれてタクシーで病院へ、そのタクシーが京都市立病院の急患入口に着いたがもう女性の看護師が待っていてくれて和博に抱かれてタクシーから降りたさくらを毛布のまま抱き抱えて走るように診察室に入った。若い看護師はベッドに寝かしてからさくらに、

「可愛いね～名前はなんていうの?」

さくらは蚊の鳴くような声で「さといさくら、4さいです」と答えていた、看護師は、「さくらちゃん～いいお名前ネ～そう、そう、吐きたかったら遠慮しないで吐いてネ～お熱を計りま～す～これが終わったら先生にポンポンを診て貰ってお薬を飲んでお熱が下がったらお家に帰れますからネ～」

さくらはこの看護師をベットに寝たまま幼い4歳の眼でまじまじと見ていた。保育園の先生も優しく綺麗だが、この看護師さんはそれより濃い目の化粧で髪型もキャンディーキャンディーに似た金髪風、それに小児科診療室なのか白衣もピンクでまだ4歳のさくらでさえ綺麗なお姉さんと感じていた。そしてさくらはこの瞬間に将来はこんな優しく綺麗な看護師さんになって大好きな爺ちゃんが病気になったらさくらが看病をすると心に誓っていた。

それから13年、母親の行方も消息も何一つないままさくらは爺ちゃんに育てられたというよりさくらが爺ちゃんをそれなりの交通福祉関係の名士に育てて爺ちゃん今では「NPO 法人満点タクシー」の理事長で安定した収入もあるが、あのままだらしのない個人タクシーの運転手で75歳の定年を迎えていたならば孫のさくらだって高校を卒業すればすぐに就職しなければならなかった。その将来の状況をもうさくらは小学校6年で把握して爺ちゃんのタクシーにお客さんが多く乗っていただくにはどうしたら良いのかと考えたのが、爺ちゃんのタクシーも「MK タクシー」に負けないぐらいの「サービス満点のタクシー」にすればいいという結論になり、まず爺ちゃんがタクシーで営業運転している時のそのだらしのない服装をまず改めるとさくらは洋服の青山でスーツ一式を買わせていたというスーパー少女の片鱗をもう見せていた。

さくらは幼年期から小学生、中学生、高校まですべて公立でまだ幼年期のピアノ教室やバレエ教室などの習い事や塾に家庭教師などの月謝があるものはすべて拒否、各学校の部活でも金のかかる衣装やユニホームなどが必要な部活はすべて拒否して学校にあるパソコンを使えるパソコン部、そんなに金がかからない陸上部に所属していた。それは毎晩爺ちゃんに聞かされるMK タクシーの値下げと一人勝ちで個人タクシーも法人タクシーも収入が半分以上に減少して大手の消費者金融から街金まで金を借りての借金地獄の果に仲間の個人タクシーの誰だれが自殺した。法人タクシーの運転手のほとんどが最低賃金以下で働き昨日も大手タクシー会社の寮で誰だれが自殺してもう法人タクシーだけでも10人を越えてしまったという話を耳にタコができるほど聞いていたので爺ちゃんにたとえ勉強に関するお金でも負担を極力かけないと思っていたからだ。

このさくらの境遇を嘆かず卑下せず自分自身で変えなければならぬと教えてくれたのは小学校5年2組の担任の坂口まりえ先生だった。まりえ先生は2組の担任の教室での自己紹介では、「私は日本人で和歌山県の出身で和歌山の高校を卒業して京都教育大学に入学して卒業してそのまま京都市立七条小学校に赴任しました。そして今年度からこの朱雀小学校の皆さんの5年2組を担当します、坂口まりえです。そして家は伏見区のワンルームマンションで一人暮らしですが、まだ恋人はいません。和歌山には祖父と祖母、それに私の母親がいますが父と母は私の小さい時に離婚して母子家庭になります」

とここまで一気にゆっくり自己紹介したが、まりえ先生は生徒の顔を見ながら先生のこともっと知りたい人は質問してくださいといったが誰も手を挙げなかった。そしてまりえ先生はこれから皆さんにも自己紹介をしてもらいますが、まず氏名、次は国籍、そして家族は誰と暮らしていますか、たとえば、

「私は〇〇〇〇です。国籍はフィリピンで父はフィリピン人で母は日本人ですが、両親は離婚して今は母と弟の3人の母子家庭です」

もう一つの例は、

「私は〇〇〇〇です。在日朝鮮人で家族は父と母と兄と姉の5人家族です」

さて、先生が自己紹介した後に皆さんは私への質問や知りたいことがなく手を挙げませんでした。これは先生が先に皆さんの知りたいことを先に紹介したからです。この皆さんが知りたいことや気になることを先に知ればもう陰口やウソの噂もなくなりますが、実はこの知りたい、気になることを噂することが「いじめ」に繋がります。

この朱雀学区でもそうだが、バブル時代には多くの外国人が京都に住むようになり朱雀小学校の生徒の約20%ほどが外国国籍で在日朝鮮人までの生徒数は戦後最大になっていたからこそ、肌の色や目の色、それに髪色や言葉の不自由もあって差別やいじめが社会問題になっていた。まりえ先生はこの差別やいじめをなくするには生徒が学校でもお誕生日会でも生徒が数人集まればまず自己紹介のルールを決めればたとえば肌の色が黒くても自己紹介で「私はインド人で父は京都大学の研究者で母と弟の家族4人で日本に来た」ことを知って入れれば推測も陰口も噂話にもならないからだ。

そして生徒の自己紹介の番が回ってきたさくらは、「里井さくらといいます。家族は70歳の爺ちゃんと二人で住んでいます。父は私が生まれる前に母と離婚して母は私が4歳の時に家を出たきりで私は幸っちゃんやイ・ヤンジャンちゃんのような母子家庭ではなく爺孫(じじまご)家庭になります。ですからお誕生日会や子供パーティに誘われてもお返しの招待が出来なかったので招待を断ってばかりいましたが、決して付き合いが悪い訳ではありません」

これはさくらへのいじめ的な悪口で、

「少しばかり可愛いと思ってお誕生日会を誘っても絶対に来ない」

という悪口がクラス中に広がっていたことへのさくらの反論だが、皆んな最初は笑っていたが、何かを感じたのか教室中静まりかえっていた。そこでまりえ先生は、「皆さんの自己紹介で皆さんの色々な境遇を先生は知りました。この自分の境遇を嘆いても卑下しても何も変わりません。先生も母子家庭で育ちましたが、こうして皆んなの先生になるまでに成長しましたが、やはり差別やいじめは随分ありました。でも自分の境遇は自分で変えなければ誰も変えてはくれませんので今日の自己紹介のようにそれぞれの境遇を皆んなで共有して仲良く助け合って勉強しましょう」

さくらはこの先生の自己紹介と少し濃い目のお化粧ととても綺麗な坂口まりえ先生に一目惚れしていた。そうなる勉強しなければまりえ先生に嫌われるのが嫌で必死に勉

強し始めたのがさくらが京大の入試でも合格出来るほどになった動機の一つになる。それから8年、小学校を卒業してもさくらはまりえ先生とはいつも連絡をとりながら今日の京都看護大学の合格通知を真っ先に報告していた。そのさくらの合格祝いをまりえ先生は先生のマンションでお祝いしてくれるというので爺ちゃんの夕食を作り置きして今夜はまりえ先生の家でお泊りとなったが、さくらは学校の行事と親戚以外での初めての外泊となった。一方の爺ちゃんはさくらの外泊を喜びもう20年来付き合っている37歳上で78歳の居酒屋のママさんの泰子を孫のいない家に招待していた。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 17 話身勝手な男は大嫌い・さくらと女性教諭の禁断の恋

小説老人と性 里坊さくら苑 17 話身勝手な男は大嫌い・さくらと女性教諭の禁断の恋

さくらがまりえ先生の家には招待されるのは初めてだが、高校に入学したころ先生は伏見区伏見稲荷大社の近くに 2LDK のマンションを買って引っ越しをしたことがある。さくらはこの引っ越しの手伝いを先生に申し入れたが、なぜか?、先生はそれをやんわり断っていた。これにさくらは傷ついてしばらく連絡を取らなかった。それに気遣って先生はさくらに伏見稲荷のお山を一回りするハイキングに誘っていた。

さくらは喜び得意の料理でお弁当を作り待ち合わせの京阪伏見稲荷駅には先生が笑顔で待っていてくれた。先生は先に先生の新居のマンションを教えるといいそのマンションの前で、

「このマンションの 3 階の 301 号室が私の部屋ですが、さくらを部屋に招待出来るのはさくらが 18 歳になって大学の試験に合格したその時に招待します。それまでにさくらの気が変わらなかったらここで合格祝をしましょう」

さくらはこのまりえ先生がさくらを部屋にまだ招待出来ない理由をなんとなく感じていた。さくらと小学校担任の先生が卒業後 3 年間も恋人のように付き合ったのはさくらが、小学校卒業式の朝、まりえ先生に「私はまりえ先生が大好きです。卒業してからも付き合ってください」という手紙を手渡したが、先生から卒業式の後に手渡された手紙には「私もさくらが大好きですから、私からも付き合ってくださいお願いします」それに先生の自宅の住所と電話番号、それと携帯電話の番号もあった。

さくらと先生は伏見稲荷大社の裏参道から仲良く手をつないでお土産の狐の面を被っては写真をパチリで少し歳の離れた仲の良い色白美人姉妹でしか見えないほど二人の顔は良く似ていた。この伏見稲荷大社は京都のいわゆる有名観光スポットではまだなく全国の稲荷信仰の熱心な信者の総本宮でお山そのものが御神体になっていた。その信者も本殿裏の千本鳥居を通り抜けた奥の院まででそれからがお山巡りになるが、この先はたまにしか人とは合わない静かなお山になっていた。

さくらとまりえ先生は奥の院の「おもかる石」という呪いをしていた。これは石の灯籠で灯を置く場所に丸い石があり、まず願い事を頭に浮かべてその石を両手で持ち上げて予想より重く感じたら願い事が叶わない。予想より軽く感じたら願い事が叶うという呪い石になる。まず、さくらが挑戦したが、これはかなり重く感じたのか、  
「先生～重いよ～願いが～叶わないよ～」

そして先生は、  
「さくらが重いというのでそのつもりで持ち上げたら軽く感じたの～ほほほ～」  
といいながらおもかる石の灯籠に改めて手を合わせていた。

ここから先は急な坂道や長い階段が続き約 40 分ほどでお山の中腹の四ツ辻になる。ここからは右回り、左回りと分かれるが、どちらの道も山を約 30 分で一周してこの四ツ辻に戻れるのでまず遭難の心配はない。この四ツ辻からは京都タワーや東寺、西山連峰の左端には天王山。その手前には広大な青い芝生のコースがある淀競馬場が、遠くには梅田のタワービルが林立しているのも見える。

この四ツ辻には白い巨大な岩があり、この岩の上は約 8 畳ほどもある岩の広場でさくらと先生はレジャーシートを広げてさくらが朝 5 時から作ったお弁当を披露していた。これを見たまりえ先生は、  
「へえ～先生が好きなものばかり... さくら、ありがとう」  
「先生、私とのお付き合いも小学校 5 年から数えたらもう 5 年にもなります。先生の好きなものはなんでも知っています」

さくらが作った弁当は野菜サラダと玉子焼き、それに南光梅をほぐしてご飯にまぶした稲荷寿司とちりめん山椒をご飯にまぶした稲荷寿司だった。先生は、  
「さくら、さくらは小学校でも中学校でも可愛くて勉強ができていつも男の子アイドルだってよく耳にするけど、好きな男の子はいるの、もう何人からラブレターをもらったの?」  
「先生、私の好きな人は先生だけです。先生だってもう 27 歳でそろそろ結婚適齢期だと私の爺ちゃんも気にしていました... 先生」  
「そう、でも私は一生涯男の子人とはお付き合いはしません。さくらも知っていると思うけど私の父は私がそう今のさくらと同じ高校 1 年の時に浮気をして母と離婚したの、それも父からは慰謝料どころか養育費ももらえず手に職もない専業主婦だった母は慣れないパートを 2 軒はしごして私と弟を育ててくれたの、それから私は男性不信になって男を大嫌いなったというのは表向きの理由になるの... 本当は生まれた時から女性に愛を感じるレズビアンなの!」

さくらも、  
「私は父にも母にも捨てられて爺ちゃんに育てられたが、先生から「自分の境遇は自分でしか変えられない」と教えて頂いてからもう父と母への怨みはその時に消えたと同時に

まりえ先生を大好きになったというのは先生と同じ表向きの理由になるの...本当は私も男の子にはなんの興味もなく、先生と同じレズビアンだと思います...先生」

さくらとまりえはこの禅問答のような会話が好きでいつもと同じだが、これはお互い小さい時から保育園の優しく綺麗な先生を好きになる性格、もしくは性癖をお互い確認していた。そして小学校や中学校、さらに高校、大学でも女子の綺麗な教諭や教師や1年、2年上の女子の先輩に憧れ身も心も好きになっていた。つまり、まりえもさくらも幼年期からのレズビアンのがあった。そしてまりえは京都教育大学時代の4年間に大好きなレズビアン先輩数人にレズの洗礼を受けていたのもう立派なレズビアンになっていた。ただ...この洗礼を受けたのはまりえは18歳からでこの先レズビアンとしてどんな試練があってもそれは自己責任になる。

一方のさくらはまだ15歳の未成年、その小学校時代の教え子を担任の教諭が自宅に連れ込み性的に淫らな行為をするということはたとえ合意だとしても絶対あってはならないからだというまりえ先生の理性と教養がさくらを部屋に入れない理由だとさくらが知る絶好の機会がこの伏見稲荷大社のお山巡りハイキングになっていた。

しかし、これはさくらが18歳になれば大好きな先生の愛を受けられるという手形のようなものでこの手形が不渡りにならないためにはさくらは京都看護学校を合格しなければならないので入試の勉強などはさほど苦にはならなかった。さらにさくらはネットを駆使してそもそもレズビアンとは?、L G B Tとは何?という勉強を始めていた。このネットの情報というのはレズをエロ動画や興味本位の記事ばかりでしかなかったが、中にはまじめで真剣なL G B T差別を取り上げているホームページもあった。

それから3年、さくらは難なく京都看護学校の試験に合格してまりえ先生の部屋にお泊まりで招かれることになっていた。そのさくらの背丈はまりえ先生を追い越すほどになりスタイル抜群でバストも先生のように立派な育ってはいしたが、まだまだ幼さが勝る可愛いらしさでこれから大好なまりえ先生にレズの相手として抱かれるために京阪電車に乗っているとはお釈迦様でもご存知あるめい。

やはりまりえ先生は駅で待っていてくれて満面の笑顔で「さくら、看護学校合格おめでとう」と駅頭だということも無視して抱きついてきた。そして3年ぶりに仲良く手をつないで伏見稲荷大社の裏参道から本殿へ、そして神様に合格のお礼をしてからさくらはまりえ先生のマンションに入ると同時に泣きながら抱きついてきた。



## 小説老人と性 里坊さくら苑 18 話 幼い魔女に翻弄 小学教諭の 生き地獄・さくら女性教諭 まりえとの初夜

小説老人と性 里坊さくら苑 18 話 幼い魔女に翻弄 小学教諭の生き地獄・さくら女性教諭  
まりえとの初夜

さくらを自宅に招待して玄関ドアを閉めると同時にさくらは感極まったのか泣きながらまりえ先生に抱きついてきた。まりえは抱きついているさくらの顔を両手で起こして軽いキスをしたが、さくらの方が積極的でまりえの唇を強烈に吸い込んでいる。もちろんさくらは生まれて初めてのキスだが、ネットの動画などで知識を得てその通りに実践したと後で笑い話としてまりえに打ち明けていた。

その昔はこういうセックスの知識は本を読んだり、先輩からの話を参考にして小学校の高学年にもなると男の子よりも性の知識はませていた。ところが昨今、パソコンという新たなツールが各家庭にも入って来た上に誰でも簡単にいわゆる H 動画が閲覧出来るのでリアルな性知識を女の子同士で共有して中学生にもなると男の子のボーイフレンドが出来るとその子とセックスするのが当然という風潮になっていた。こうなると学校も親も生徒にセックスをするなどは強制は出来ないので苦肉の策として①妊娠しない避妊教育②性病に感染しない教育③後悔しないという精神的教育でお茶を濁してきた。

さらに小学高学年にもなるとませた女兒は男性教諭からの視線で性の駆け引きを学んでいた。男性の教諭は自分の気に入った女兒の胸元から膨らみ始めた乳房やお尻、それにスカートならその中が気になるのかどうしても視線というビームが発射されて女兒の皮膚に突き刺さる。いつも無邪気に遊んでいる最中の子供でもこの先生の視線ビームを感じてはいるが、そこは知らないふりをする女性独特の礼儀をわきまえていた。

これは男性教諭だけの専売特許ではなく女性教諭も好みの男児の性的に成長する姿に視線ビームを浴びせてはいたが、奥手の男児にはこの視線を感じる感性はまだ発達はしていなかった。また、これは異性だけに発射されるビームではなくゲイの教諭は同性の男児に、レズビアン教諭は同性の女兒にも発射される。さくらも小学 4 年生ぐらいから男性教諭のほとんどからの視線ビームを浴びていた。この頃から小学校や中学校の男

性教諭が同じ学校の女性用トイレを盗撮したり女子更衣室を盗撮して逮捕されるというニュースは各地から頻繁に発信されていた、それに中学校の校長が他校の中学校の女生徒とネットの援助交際で知り合い金を渡して女生徒に淫らな行為をして逮捕されたという話題はさくらの小学校中に尾ひれがついて女兒が集まればこの話で盛り上がっていた。

学校の方にも教育委員会から厳重な通達があり、特に校長からは生理が始まった女兒は大人顔負けの色気を発散するから目の配り方から話し方、そして女兒の身体には指導であっても絶対に触れてはならない。学校内外でも生徒と二人きりにならないという規則を内々に作っていた。そうなるませた一部の女生徒は先生とふざける振りをしてまだまだ未熟な体を男性教諭の腕や脚に擦り寄せるなどをして先生をからかっていた。

一方の男性教諭も同僚の教諭らと幼い女兒からの妖しい誘惑の防衛や情報の共有を学校に近い四条大宮の居酒屋に連日のように集まり作戦を練っていた。ある教諭は、「特に6年生の青木瑠璃子、坂本幸子、田口佳穂、それに吉川久乃、山本はるか5名は気を付けなくては行けない。あいつらは我々教諭を完全になめてお色気作戦を楽しんでその成果を話し合っているようだ!」

「その通りだが、我々もなるべく視線を外してもあいつらはそれを知っているようでわざとふざけて俺の視線に小さな胸を入れてきよる」

「あいつらは親の前ではまだ子供子供もしているのを演じているが、我々男の教諭の前では幼い魔女に見える」

「そうそう、山科の小学校で6年生の女兒が学校の保健室で赤ん坊を産んだそうだが、その生徒は元々太った体格で親も担任の先生も妊娠が気がつかなかっただけで、そして誰の子供だと校長が聞けばその子はあっさり担任の先生を指差したらしい」

「その先生、職も妻も家族も失った上に刑務所やな～幼い魔女に取り憑かれたと言っただけで、弁解も小学校や中学校の男の教諭しかわからない生き地獄になる」

こういう話しを連日のようにしていたが、この先生らの結論はこういう幼い魔女のお遊びの餌食には絶対ならないために連絡を密にしようとなり連日のように居酒屋に集合していた。さくらはこういう環境の小学校で育っていたが、さくらの担任のまりえ先生をレズビアンだと察知したさくらはさくらの方からまりえ先生に視線ビームを発射していた。それを受け止めたまりえ先生とさくらは小学校卒業後も中学、高校卒業まで清らかな関係で付き合っていた。この間もさくらの同級生らは彼氏ができて処女を失ったとか、誰だれが誰と付き合っているだとかの性に関する情報はさくらの耳には入ってはいたが、さくらは体の芯から湧いてくるモヤモヤと戦いながら京都看護学校に合格すれば先生の恋人になれると8年間も信じてきたからこそ先生の部屋に一歩足を入れただけで感極まっていた。

まりえのマンションは2LDKで8畳と6畳の部屋があり、奥の部屋はベツトルールで6畳の部屋のテーブルには野菜を中心にした料理が並び、ちらし寿司のデコレーションの上には高そうなマグロ、海老、うなぎ、タコの具や野菜が彩り良く配置されていた。さくらは、

「先生～私の好きなものばかりで先生は覚えていてくれたの～」

「そら～そうよ!たしか、さくらの初潮の時の内祝いのお料理が、さくらが大好きな「ちらし寿司」だと聞いていたから今日のこの日は私もちらし寿司を作ろうともう何年も前から料理の勉強をしていたの」

そしてまりえは京都看護大学合格のお祝いだと高島屋の包み紙にリボンを飾ったプレゼントを渡していた。さくらは大喜びで中を見るとそこには、ワコールのセクシーランジェリーで色は薄いピンクの透けすけの生地のカミソール、ブラジャー、ショーツの3点セットだったが、さくらはおもわず、

「先生～エッチ～!」

と叫んでいた。

楽しい祝宴もお開きになりまりえ先生はさくらに、  
「さくら、さっとシャワーを浴びてきて～上がるときは先生に合図してくれたらバスタオルで迎えに行きます。その次に先生もさっとシャワーを浴びますからその間にあのセクシーな下着を着てベッドで待っていて」

さくらは先生の指示通りに着がえてベッドに座って待っていたが、このベッドのある部屋の窓にはレースのカーテンとは別に真っ黒の厚手のカーテンがあった。先生はすぐにバスタオルを全身に巻いてバスルームから出てきてさくらのピンクの下着姿に感動したのか、暫く目に焼き付けてから部屋の照明を落とした。そこは真っ暗闇の世界で目の前の先生の顔さえ分からない。

先生は優しくさくらを寝かしてキスをしてくれたが、その先生の唇がさくらの唇に触れた瞬間にさくらの全神経が唇に集まり全身が持ち上がるほどの力でビクッ!と反応していた。そのビクッ!を先生に悟られるのが恥ずかしいさくらは両手でシーツを力の限り鷲掴みにしていた。キスが終ると先生の右手はさくらの左乳房をカミソールの上から優しく擦り乳首を人差し指で軽くトントンと叩くとさくらはのけぞって先生をベッドから落とすほどビクッ!ビクッ!と感じていた。

まりえがこのレズビアンテクニックを学んだのは京都教育大学の3回生になった直後に先輩から、

「まりえは2年間先輩からネコ(女役)として可愛がってもらったが、この大学のレズのルールでは3回生から新入生と2回生にレズを指導するタチ(男役)にならなければならない。つまり、まりえが先輩から受けたレズのテクニックを長く伝承するために今学期から後輩を仕込んでほしいとの命令か下されてまりえは自分が先輩から受けたテクニックを後輩に教えていた。このベッドの部屋を真っ暗闇にするというのもテクの一つで人は真っ暗闇の世界では五感が普段の3~5倍も研ぎ澄まされて愛撫されている場所にその5倍ほどの神経が集中するために異常に敏感になり全身が性感帯でくまなく感じるとまりえは先輩から教わっていたことを今夜はさくらにレズビアンの極意として伝授していた。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 19 話女性教諭まりえの大学時代・ 教え子さくらに愛の調教

小説老人と性 里坊さくら苑 19 話女性教諭まりえの大学時代・教え子さくらに愛の調教

まりえがこのレズビアン初体験の洗礼を受けたのはやはり今まりえが愛撫しているさくらと同じ 18 歳で京都教育大学に入学してすぐに 2 年先輩の憧れの姫の海野美子に誘われてというよりまりえの方から視線ビームを発射していた。まりえは自分がレズビアン  
の気があると気づいたのは中学 1 年の頃に学校内でも男の子に大人気の 3 年生の理恵先  
輩を好きになっていた。この理恵とは仲が良かったが、理恵はそんなレズの匂いさえ感  
じないまま卒業していた。

高校に入ってから自分と同じレズの匂いをする女子生徒を探したが生徒にはいなか  
った。ただ 40 代の女性教諭の高畑先生からは視線ビームを発射されてはいたが、まり  
えは好きにはなれなかった。しかし、色々レズの話先生から聞きたくて高畑先生とは  
放課後に静かな公園や喫茶店で会ってはレズの情報を集めていた。先生からはしきりに  
先生の自宅にこいと誘われたが、なんとか理由を見つけては丁寧に辞退していた。

その高畑先生は京都教育大学を卒業して和歌山で教諭となったが、その教育大学には  
伝統的にレズビアンが盛んで全国からレズか集まり関東グループ、関西グループなどの  
レズグループが数団体あるというのを聞いたまりえは元々教育大学希望だったので和歌  
山からは近い京都教育大学に受験していた。その教育大学に入学が決まったことを高畑  
先生は喜んでお祝いだと自宅に招待されたが断るのに苦労していたが、先生は京都教育  
大学の O B レズネットワークを通じて坂口まりえを宜しくというメッセージを発してい  
たので入学手続き当日には海野美子が待つていてくれて学食のランチを共にしてその美  
子の知的な清潔感に一目惚れしていた。

まりえは美子と同じワンルームマンションに空き室があると聞いてそこに入居してい  
た。その百合マンションは女性専用の 4 階建て 16 室で男性のマンション訪問は固く禁じ  
られて必然的に教育大学と龍谷大学のレズの拠点になっていた。その引っ越しの夜、近  
所の居酒屋で美子のレズ仲間 4 人とともにまりえの歓迎の宴が開催されていた。まだ 18

歳のまりえは酒は飲めなかったが、そこはそこで甘い白ワインを少し飲んでいたので気分はかなりハイになっていた。

本来なら新入生の歓迎会では新入生がレズの気があるのか?、レズに興味があるのか?、その探りには半年ほどかかるが、このまりえはまだレズの経験はないが、レズ希望との情報がレズOBの高畑教諭から美子に届いていたのでこのレズ仲間はまたいつもと違う歓迎会になっていた。そしてこの場の暗黙の了解でまりえは美子がレズの調教師になることも了承されていた。

美子はまりえに、  
「私がまりえの最初のお相手になるが、まりえは私でいいの?」  
「はい、私は美子先輩に最初にお会いした時からビビット感じていました」  
「そう、それならまりえの都合のいい日を言って」  
「あの～今夜～でも良いですか?」

こうしてまりえの最初の京都の夜に美子先輩の部屋に招かれていた。美子は高島屋の包み紙にリボンがかけられた入学祝いプレゼントをまりえに手渡していた。まりえは歓声を上げて喜びながら中を見るとそこにはワコールのセクシーランジェリーで薄いピンクの透けすけのキャミソール、ブラ、ショーツの3点セットでまりえはおもわず、  
「美子先輩～エッチです～～～」

そしてまりえに、  
「ここのお風呂は狭いから先にまりえがササッとシャワーを浴びて上がる時に合図して私がバスタオルで迎えに行きます。そしてあのセクシーランジェリーに着替えてベッドで待つていて私もササッとシャワーを浴びて来ますから」  
とまりえに指示を出していた。

まりえは自分の12年前の初夜のシーンを思い出しながらもさくらへの優しい愛撫の手は抜かなかった。やがてまりえのバスタオルもさくらのブラジャーもショーツもなく二人は真裸になり、まりえの豊満な乳房をさくらのこれまた豊満な乳房に押し付けるとさくらはこれまで感じているのを先生に分かると恥ずかしいと思い歯を食いしばり声が出るのを我慢して両手でシーツを鷲掴みしてこらえていたが、この瞬間にさくらの両手は先生の髪を鷲掴みにして「ああ～うう～」と艶めかしい声を出していた。

攻めるタチのまりえはこの相手が極限に出すこの歓喜の声を身体全体で受け止めた瞬間に喜びを感じ満足するのがタチだと理解していた。これが男だとこの極限で終わるのだが、レズのセックスはこれまでは序盤でここからが本番になっていた。まりえの右手

の中指はオンナが最も感じる真珠の小粒を探し当てていた。この真珠を指の指紋で軽く下から上へと擦り上げるとさくらは下から先生を持ち上げるほどの力で感じてくれるのでタチのまりえとしては何回も何回もの喜びをさくらから与えてもらっていた。そしてまりえはクライマックスの仕上げとしてさくらの秘蜜の花園に唇を近づけるとそれを察知したさくらの全神経は5倍ほど増殖して花園一点に大集結していた。

さくらが小学校の恩師の坂口まりえの家で外泊するというので爺ちゃんの和博ももう20年来付きあっている行きつけの居酒屋の泰子ママを家に招待していた。この泰子ママは爺ちゃんより三つ年上の78歳でさくらもママと爺ちゃんの仲は知っていたのでさくらはこの夜の爺ちゃんの夕食も二人分作り置きしていた。そのさくらの料理で二人は宴会をしてお開きになり爺ちゃんは泰子ママに、  
「ラブホテルよりは窮屈だけど二人で風呂に入ろう」

「和ちゃん、まだ、さくらちゃんと一緒に風呂に入っているの?」  
「そう、なんぼ孫だといってもピチピチの白い肌が目の前にあるのは生き地獄より、辛いときもある。さくらは今まで育てて貰ってなんのお返しも出来ないからせめてわしの背中を流すというが...」  
「そうなの、そのさくらちゃんの肌と私の肌と比べられるのが嫌ですから和ちゃん一人で入って」

泰子ママが先に風呂に入り、和博が風呂から上がると泰子ママがなにやら怪しげなポーズで立っていた。和博が見たのは泰子ママが透けすけ生地のピンクのブラにキャミソールとビキニパンツだが、透けすけ部分は三段腹の深い溝のボーダー模様だが、いつものベージュのババパンツよりはかなりセクシーで和博は、  
「泰子ママ、メチャよく似合って10歳は若く見える!」

「あら、たった10歳だけ?」  
「ハハハ、実はわしも友人からバイアグラを一錠もらい泰子ママに内緒で2時間前に飲んだが、泰子ママの透けすけパンツの影響か?、バイアグラの効果かは分からないが...ほら」

と、腰に巻いていたバスタオルを取るとそこには七分ほど勃起したナニがあった。

## 小説老人と性 里坊さくら苑 20 話さくら 19 歳、母親の浴衣、振り袖を着て祇園祭宵山、成人式へ

小説老人と性 里坊さくら苑 20 話さくら 19 歳、母親の浴衣、振り袖を着て祇園祭宵山、成人式へ

さくらが京都看護大学に入学と同時に爺ちゃんの恋人の泰子ママが居酒屋を店仕舞して毎日のように爺ちゃんとさくらの夕飯を作りに来てくれた。そして毎日のように3人は楽しい夕食を食べていた。泰子ママの料理はいわゆる「おふくろの味」という居酒屋風料理で爺ちゃんの口にもさくらの口にも合った。さくらは大いに感謝して使った食材や爺ちゃんの飲む焼酎、掃除洗濯などの消耗品などは領収書もいらないから私に請求してほしいというが、泰子ママは、

「そなん、私もここで食べ飲んでいるのですから、それに和ちゃんにもお金を貰っていますから」

「でもね～こういうことはルールを決めたほうがお互いいいと思うの...それに毎日ここに来るのも大変だったらここに泊まって下さい。私は二階に引っ越ししますから一階は泰子ママが自由に使って下さい」

「でも～私ももうすぐ79歳でこのまま何歳まで元気でいられるかは分かりませんが...」

「私は看護大学を卒業すれば病院勤務になり夜勤も当直にもなり毎日爺ちゃんの世話は出来ません。もし、泰子ママがこの家に入ってくれば安心になります」

こうして泰子ママと爺ちゃんは一つ屋根の下で住むようになったが、それは結婚とかという概念ではなく気の合う男女の同居でそれプラス爺ちゃんの孫のさくらも加わった共同家族となった。さくらは二階に引っ越しをしたが、二階の奥の八畳の間は爺ちゃんの娘でさくらの母親の尚美が二十歳まで住んでいた部屋でベッドや子供の頃習っていた電子ピアノやコンボもそのまま置かれてあった。この部屋をそのまま保存しているのはいずれ尚美が帰ってくるという爺ちゃんとさくらの暗黙の了解になっていたからだ。

その部屋はそのままにして表側の八畳の部屋でフローリングの洋室をさくらの部屋に決めていた。さくらはネットで手元で照明が調節出来るセミダブルベッドや洋服ダンス、それにピンクのカーテンと黒の厚手のカーテンを購入していた。さらに明るい壁紙を購入して何日もかけて器用に貼っていたが、これにはさくらの小学時代の恩師で今はさく

らの恋人のまりえ先生も手伝いに来てくれてその夜は泰子ママの手料理で爺ちゃんとまりえ先生とさくらの楽しい宴会になっていた。

さくらが京都看護大学に入学して一年が過ぎた頃、泰子ママがどうもさくらとまりえ先生が怪しいという女独特の勘で見えるようになっていた。この夜はさくらがまりえ先生の家にお泊まりで爺ちゃんと泰子ママの二人で食事をしていた。泰子ママは和ちゃんに、「さくらちゃんとまりえさんは随分仲が良いが...なんか和ちゃんは知っているの?」

「いや、さくらの小学5年6年の担任でさくらはまりえ先生が大好きで今でも恩師だと慕っている関係だとわしは思っているが...何か?」

「いえね、私の第六感だとあの二人、ほら、あれ、あれよ、同性を好きになる、ほらほら、レズとかなんとか?」

「あぁ、レズビアンか?そういえば大学生にもなるのにさくらの口からは男の話は聞いたことがない。泰子ママはどうしてさくらがそのレズだと分かったの?」

泰子ママは別にさくらを監視しているのではないが、と前置きしてから、「私がこの家に来てもう一年になるが、さくらちゃんとまりえさんとは月に1回ずつお互いの家にお泊りをしている。お泊りといってもさくらちゃんの部屋にはお客様の布団などないからあのベッドで二人が寝ているが、時々深夜にさくらちゃんの艶めかしい声が聞こえてくるの...和ちゃんは焼酎を飲んで爆睡しているし~私はまりえさんか泊まる夜は一人で悶々として地獄の夜を耐えているの」

「そうか~まだ泰子ママも若い...2階を気にすれば気にするほど耳がダンボになって普段の5倍は聞こえるのだろう。それならこちらも負けずにまりえさんが泊まる夜はこっちもエッチをすればいい」

「あら、和ちゃんはさくらちゃんがレズビアンでも気にならないの?」

「まあな~でもこちらも79歳の泰子ママと76歳の老人の同棲だから世間から見れば常識外れにはなる。そのわしが孫のレズビアンをとやかくいう資格もない」

「まあ~ネ、私なんて和ちゃんとのこの事を皆さん、色気ババーとか、エロキチだと悪口を言いふらしているが、反面、羨ましいので嫉妬と妬みが悪口を言いふらしていると自分にいい聞かしているの」

「その通りだ!わしと同一年の個人タクシー運転手も性欲はあるのに嫁がエッチを拒否するので悩んでいる。だからといってもそんな簡単にわしのように泰子ママができるものではない」

「私の店のお客さんも嫁も妻もいるのにエッチはもう何年もしていないという客ばかりで可哀そうになるわ...もっと夫婦だからエッチのことを日頃の話にすればいいのに...」

「そう、エッチの話は夫婦や家族でタブーとするのが美德だという風潮が邪魔をしている。そういう意味ではわしは幸せで死ぬまでに後何回泰子ママとエッチが出来るかは分からないが、そうそう、今夜はさくらがいらないからこちらも遠慮なく愛し合おう」

「あら、それならさくらちゃんに月2回は外泊してもらいましょう。でもね~和ちゃん、

私は和ちゃんのナニが使えなくなってもエッチ遊びは出来ると思っているの、だからバイアグラなんて飲まなくてもいいのよ～和ちゃん～ほほほ」

その頃、さくらとまりえ先生も京阪伏見稲荷駅近くのマンションで仲良く夕飯を食べていた。まりえは、

「どう、もう看護大学に入って一年になるけど可愛い学生はいるの?」

「う～ん～可愛いといえば皆んなまだ初々しいので可愛いですよ!、でもまだ19歳でお酒も飲めないからお茶の席では誰がまだレズだかは分かりません」

「そうよね～でも、さくら好きな人が出来ても私のことは気にしないでね」

「そんな～でも先生も私に飽きたら遠慮なく行って下さい。それにいつも私を可愛がってくれるばっかして私は先生になんのお返しも出来ないのので心が苦しいのです」

「そうなのでもそれはさくらがしっかりネコをマスターしたら必ずタチでも満足を得ますからそんな私にお返しなんてことを考えないで快感だけを追求して...そうすれば必ず誰かを抱き満足させたいくなります。その時になったら私を抱いて...さくら」

「はい、先生、分かりました」

それから半年後に来年の成人式の案内が京都市から来た。さくらの同級生もこの話題で湧いていたが、まだ半年ほどあるのに貸衣装と美容室、着付けの予約はもう始まっていた。その話を泰子ママとしていると、爺ちゃんが、

「待てよ、たしか尚美の成人式の振り袖は貸衣装ではなくわしの家内が誂えたはずだ。その頃の個人タクシーはバブルの真っ最中でかなり儲かっていた。その最中に家内は浮気をして家を出て尚美は尚美で勤めていた信用金庫を辞めて遊びに夢中になっていた。そして成人式にはもうさくらを身ごもっていた。だから、尚美の振り袖は成人式の1回しか着ていない。泰子ママ、尚美の部屋の和筆筒を調べてほしい」

泰子ママとさくらは和筆筒から振り袖をすぐに見つけて尚美の成人式の記念写真と見比べていたが間違いなく尚美の振り袖だった。爺ちゃんの話によるとこの振り袖のお腹にはさくらが宿っているといっただけだったが、その尚美の成人式の写真に写っている尚美はまだ幼さが残るかなりの美人だった。早速、泰子ママはこの振り袖をさくらに着せていた。泰子ママは居酒屋の店でも着物オンリーで今でも近所の美容室の客に着付けをしていた。

その振り袖姿のまま下に降りて爺ちゃんにさくらの振り袖姿を見せると爺ちゃんは目を点にして、

「尚美だと一瞬思った～そかそか、よく似合っている。まだ半年先だが、尚美の成人式の写真を撮った写真館を明日予約しに行く」

そこで泰子ママが、  
「尚美さんの和筆筒には浴衣も数反あったから、さくらちゃんとまりえ先生の浴衣の着付けを私がしますからまりえ先生を祇園祭の宵山に招待したら?」  
「ええ～ありがとう泰子ママ」  
「どうせなら私がおごりますから京都ホテルでディナーをして部屋を二部屋とって楽しい愛の夜を過ごしません～さくらちゃん?」  
「えっ?、泰子ママ、何か知っているの?」  
「まあ～でも私も和ちゃんも人の事をあれこれ言う資格なんてないからさくらちゃんの好きなように人生を歩んでほしいと願っているだけ」  
「泰子ママ、爺ちゃんありがとう～」



---

小説 老人ホーム「里坊さくら苑」

---

著 音川伊奈利

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---